

Costume and Social Stratification among the Aztecs : An Approach to Aztec Rulership

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 致広 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004419

アステカ社会における衣裳と職務

——アステカ王権に関する一考察——

小 林 致 広*

Costume and Social Stratification among the Aztecs:
An Approach to Aztec Rulership

Munehiro KOBAYASHI

The *huey tlatoani* (Aztec Supreme Ruler) received various kinds and a large quantity of sumptuous costumes through the imperial tributary system. According to the tribute rolls of the Aztec Empire, more than one hundred thousand mantles and about six hundred sets of warrior's attire together with many precious accessories were collected from more than forty tributary regions. All of them were prohibited to the *macehualli* (commoners), who could not wear cotton mantles. These sumptuous and privileged costumes were designated to the dominant groups in the Aztec military and bureaucratic hierarchy.

The primary materials for such costumes, such as precious feathers, precious stones and gold, were collected by the *pochteca* (long-distance trader) as well as by a tribute system. They travelled far beyond the Isthmus of Tehuantepec carrying the ruler's goods and their personal goods in order to exchange them for the primary materials. These materials were manufactured into the precious costume by the so-called *tolteca* ("master of artifacts").

Each Aztec costume was assigned to a particular level of position or officer. A warrior's costume was determined by the number of captives that he had taken in battle. Several types of martial attire functioned as a visual ranking mechanism within the Aztec military and bureaucratic system. These costumes were distributed to the *tequihuas*, in Nahuatl "he who has an office," on various occasions when the Aztec social stratification was revealed and expressed theatrically.

* 神戸市外国語大学, 国立民族学博物館研究協力者

In the monthly festivals that corresponded to the months when imperial tributes were collected, a large amount of costumes would be distributed to the nobles, valiant warriors and even to enemy rulers. In the case of an enthronement or funeral of the ruler and the inauguration of public monuments, some low grade costumes were divided among the artisans who had contributed to the accomplishment of the ruler's task. The *huey tlatoani*, who was regarded as the heart of the city-state, could control and monopolize the sumptuous costume in compensation for the slavish tasks that he was required to perform to maintain the cosmic and social order.

はじめに	2. 遠隔地交易商人と王権
I. 首都に集荷された「衣裳」	3. 羽毛細工師と貴金属・宝石細工師
1. 「貢納表」における衣類	III. 威信財の再分配と王権
2. 「貢納表」における武具類	1. 「衣裳」の序列
3. 「貢納表」における装身具類	2. 威信財再分配の場としての祭式
II. 威信財の生産・流通と職能集団	3. 平民への再分配と王権
1. 原材料の調達	おわりに——王権と職務——

はじめに

アステカの社会・経済体制をめぐる議論は、モルガンにより図式化され [モルガン 1958] バンドリア [BANDELIER 1878, 1879] によって提示された枠組に大きく規定された。かれらのアステカ = 部族連合社会論を否定した「国家段階論」 [MORENO 1931; CASO 1963] や「アジアの生産様式論」, 「ポランニー理論」, 「垂直統御論」などを援用した諸々の修正論¹⁾でも、「部族から国家へ」という社会進化論的枠組そのものは、つねに堅持されている。そしてアステカ社会の位置づけは、土地保有・相続システム, 耕作・労働システムの分析にもとづいておこなわれる傾向にあった²⁾。

1) 「アジアの生産様式論」をアステカに適用する試みは、1950年代末 Palerm らによって開始された。しかし、理論や諸概念の安易な適用の域をでないもの [BARTRA 1975] や、水利社会論に特化したもの [PALERM and WOLF 1972] が大部分であった。1970年代以降のエスノヒストリーの発展にともない実証的レベルでの適用も試みられている [BEAUCAGE 1976; REYES GARCÍA 1977; OLIVERA 1978]。エスノヒストリー研究のリーダー Carrasco は極めて折衷主義的に諸理論を適用しようとしている [CARRASCO 1971, 1978, 1979b] が、その非生産性を指摘した Offner [1981] の批判のほうが的をえている。

2) 「地方文書」を利用した新しい実証研究としては、Calnek [1974], Harvey and Prem (eds.) [1984] を参照。

しかし、この種の議論は、史料および方法論上で大きな欠陥を有していた。利用された「古典的資料」の多くは、情報データ（場所・時代・情報源）が特定されていず、「異教時代のインディオ」像を一般化して記述しがちであった。「古典的資料」の分析によるアステカ論のもつ地域的変異を無視するという欠陥は、1970年代以降の「地方文書」の分析研究によって明白となっている [CARRASCO and BRODA (eds.). 1976]。一方、方法論上でも、生産様式の記述・分析・位置づけに議論は限定され、アステカの社会生活を大きく規定したと思われる諸種の祭式・儀礼や戦争といった非生産活動と生産様式のからみあいに論及するものは皆無に近かった。Harner [1977] や Harris [1977] によるアステカ食人慣習 = 蛋白質補給論といった「文化唯物論」者の奇論を除けば、Johanna Broda の一連の研究が初めて、正面からこの問題にアプローチしたものとさえいえる [BRODA 1976, 1978c, 1979, 1982]。

Broda は、祭式・儀礼や戦争における王、戦士・貴族、平民の関与のあり方、財の交換・再分配の様式に注目し、貢納品として集荷された武具類と社会階層の対応関係を指摘し、生産のなかに埋めこまれたアステカのイデオロギーを読み取ることの重要性を主張した。本稿は、基本的には Broda の方法論を踏まえ、アステカの貢納体制の一側面を分析するものである。旧稿では、食料という生存財の分析により貢納体制を分析したが [小林 1979]、本稿では、衣類・武具類・装身具など威信財の分析を手掛かりに、アステカにおける王の権能とそれに関与する職務システムの解明を試みる。

以下、第Ⅰ章では、貢納記録の分析により貢納で集荷された衣類・武具類・装身具の種類・量の記述、第Ⅱ章では、それらの財の生産・流通に関与する職能集団の紹介、第Ⅲ章では集荷された威信財の再分配に関与した社会階層、財の再分配の場としての祭式・儀礼、戦争・公共事業などと王権の関連を解明する。これらの作業から、王権に支配され、王権を支える人々のなかに存在した「職務」(tequiotl) という概念にアプローチしてみたい。

I. 首都に集荷された「衣裳」

メソアメリカにおける財の交換には、貢納・遠隔地交易・地域市場の3種の形態があったとされるが [BERDAN 1977, 1978a]、そのなかで史料がもっとも多く残っているのが貢納についてである。本章では、メシカ³⁾ 大領主への貢納記録である「貢納

3) メシカは、テスココ、トラコパンとともに三都市同盟＝アステカを構成する民族集団である。

表⁴⁾における衣類、武具類、装身具類（以下「衣裳」とする）の説明をおこなう。貢納品目は多岐にわたるが、上記のカテゴリーに属するものは、基本的消費財というより、アステカ社会の社会階層構造と対応していた威信財・奢侈財とすべきだろう。衣裳の分析から社会における人間関係のあり方を解読できることは、指摘するまでもないであろう [SAHLINS 1976: 179-189; ボガトウイリョフ 1981]。

1. 「貢納表」における衣類

「貢納表」(図1)に記載された衣類は男性用の上衣と下帯 (maxtlatl) および女性用の上衣 (huipilli) とスカート (cucitl) に大別できる。「貢納表」に記載されている衣類の大部分は、スペイン語で manta とよばれた男性用上衣である。この manta 類は、柄・縁飾りのない無地布 (quachtli) と、tilmatli とよばれる柄・縁飾りのついたものに二分される (図3)。これらの衣類の材料は、大部分が木綿であるが、木綿の確保できない寒冷地ではマゲイ繊維、あるいはヤシ (icxotl) の葉繊維等が利用されていた。manta 類は、幅 1 cemitl (約 1.25 m)、長さ 1 cematl (約 1.67 m) のものが標準であったと思われる [CASTILLO 1972a]。

(1) 無地布

無地布は、地域市場での交換に際して、基準通貨としても利用されていた [DURAND-FOREST 1971]。「貢納表」で無地布と同定しうるものには、3種のタイプがある (図3)。まったくの無地のもの (Q₁) が、V字型の線のあるもの (Q₂) やとげ針状のものがえがかれているもの (Q₃) とがどのように異なるものかは、MT のナワトル語注記、CM のスペイン語注記からだけでは確定できない。Q₃ に対し、MT のナワトル語注記は yccotilmatli (ヤシ葉繊維製マント)、CM のスペイン語注記は henequen blando (柔らかいエネケン) でできたマントと異なった説明をしている。Q₂ に対しては、Q₁ と区別したような注記はまったくない。ただ絵符との対応関係がないものの、MT では、quachtli 以外に、canavac (狭い木綿無地布)、ichtilmatli (マゲイ繊維布) といった注記、CM では、mantas grandes (大きなマント)、mantillas blancas (白いショール) などの注記が、Q₁、Q₂ に与えられている。無地布の3類型が、素材 (木綿、マゲイ、ヤシ葉) あるいは大きさの差などを反映していることは推定できるが、その対応関係を確定することはできない。

4) 「貢納表」は、Matrícula de Tributos (1980, 以下 MT), Códice Mendocino II parte (1964, 以下 CM II) および Información [SCHOLÉS and ADAMS 1957] の3種の貢納記録の原本と想定されるものである [BERDAN 1976a; 小林 1979]。

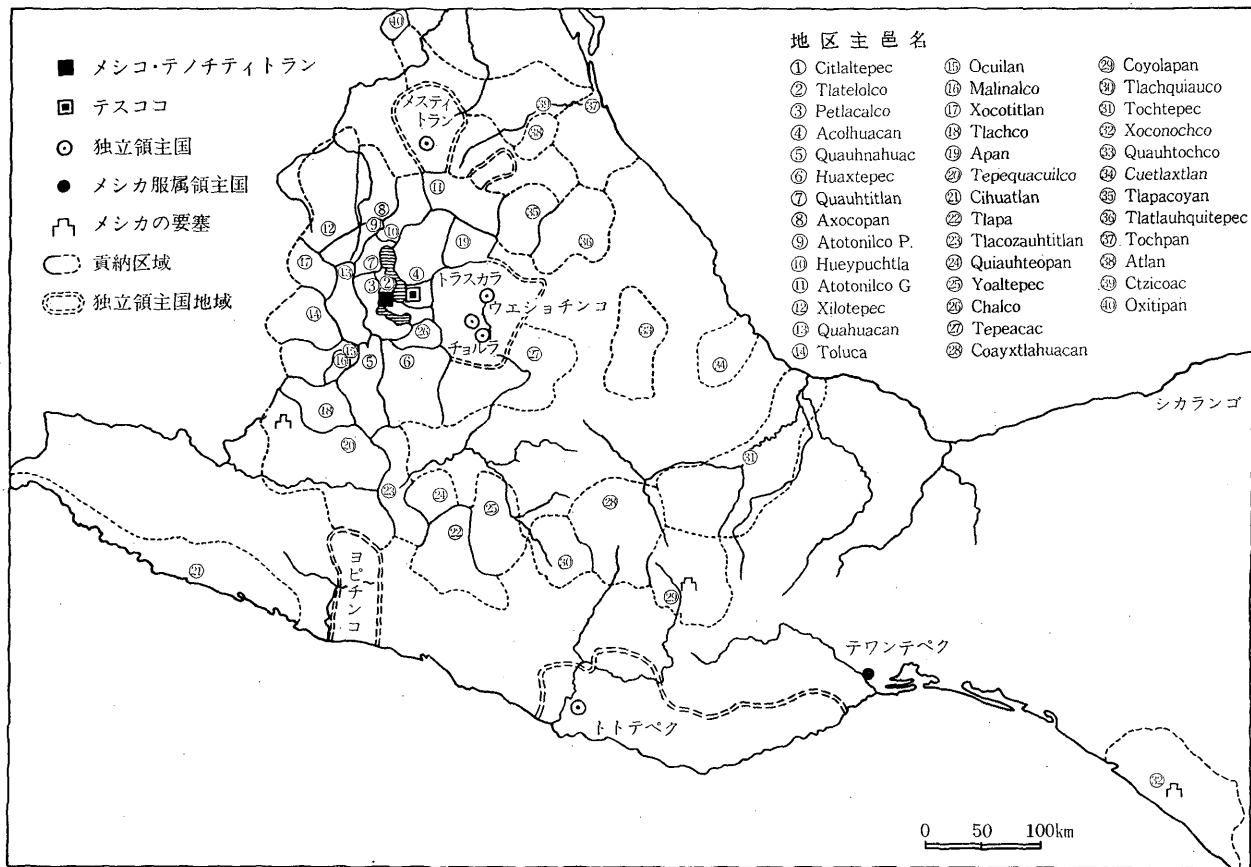


図2 メシカ大領主の貢納区

「貢納表」の無地布の解説に関しては、もうひとつの問題がある。それは無地布の絵符のうえに描かれている指絵符(図1)の評価である。これに関しては、無地布の枚数、一枚の無地布に継ぎ合されている布の枚数を指示するものでなく、無地布の丈を指示するという Borah らの見解 [BORAH and Cook 1963: 42-43] に従いたい。1本の指が通常の丈 1 *cemmatl* を示していると考えたい。「貢納表」には、2倍丈4倍丈、8倍丈のものがみられる。

さて無地布だけでなく、すべての衣類絵符には樹枝状の絵符がつけられている(図1)。これは、400 (*centzontli*) を指示する髪毛 (*tzontli*) の絵符である。これによって衣類の枚数が指示されるわけだが、その計算の仕方には2つの見解がある。枚数を指示しているという見解と、一荷 (*carga*) を指示したものだからさらに20枚を乗じなければならないとする見解 [MOLINS FÁBREGA 1954/1955] である。後者は CM の注記に *carga* とあることに留意した見解だが、MT のナワトル語注記はその種の単位を指示してはいない。本稿では、前者の見解に従う。

メシカ大領主に貢納された衣類の量を「貢納表」から推測する場合の最大の問題は、「貢納表」に記載された貢納品の量が、1年間の量であるか否かが確定できないことである。MT や CM の注記には、しばしば、個別の品目ごとに「20日毎」、「80日毎」、「年に2度」、「年に1度」と貢納頻度を示すものがある。同一貢納区の品目でも異なった頻度の注記がみられるし、MT と CM では同一貢納区の同一品目に対する注記が異なる例も多い。本稿では、注記から頻度を推定することをせず、「貢納表」に記載されている貢納品の量は、1度の貢納期にメシコ大領主に納入されるものと画一的に判断することにした。貢納期がどのような頻度で設定されていたかについては、80日毎、すなわち年4.5回とする案と、年祭に対応して年4回とする案とを考える。いずれが妥当かを判断する材料はない。

以上の点を踏まえたうえで、無地布の貢納量を整理したものを表2に示した。その量は「貢納表」に記載されている量目を示したもので、年間貢納量ではない。無地布は、「貢納表」の40貢納区⁵⁾中32区から納入されている。その総量は標準の無地布に換算して、50,800枚となる。

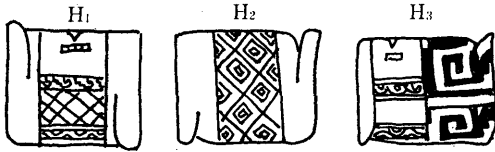
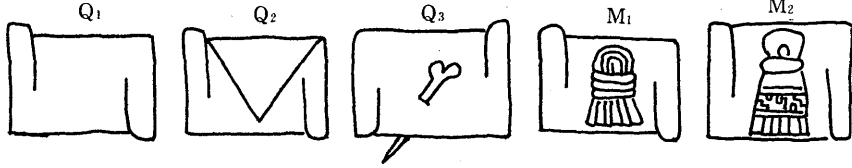
(2) 男性用下帯および女性用衣類

男性用下帯 (*maxtlatl*) は赤・黄・青の彩色のもの (M_1) と、赤色地にフリーズ状

5) 「貢納表」の貢納区数に関して、従来は CM II に従って38区とする見解 [MOLINS FÁBREGA 1954/1955], 35区とする見解 [BRODA 1978a] があるが、筆者は Citlaltepec, Apan を含めた40区を貢納地区数の下限と考える [BORAH and Cook 1963; 小林 1979]。

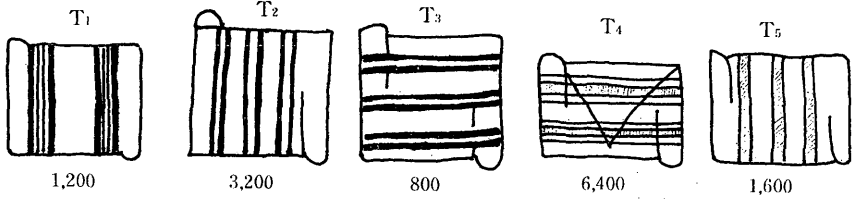
無地布(quachtli)

下帯(maxtlatl)



女性用衣類

柄物マント(tilmatli)



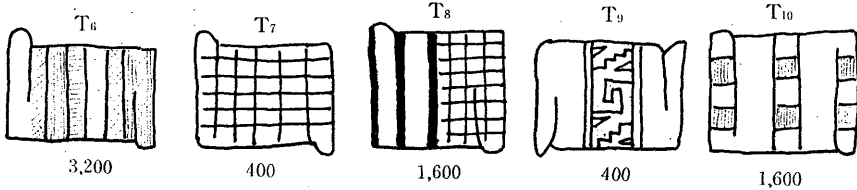
1,200

3,200

800

6,400

1,600



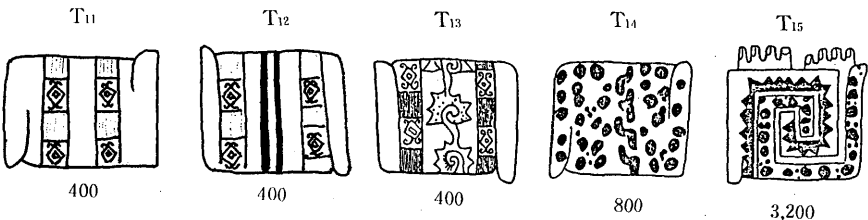
3,200

400

1,600

400

1,600



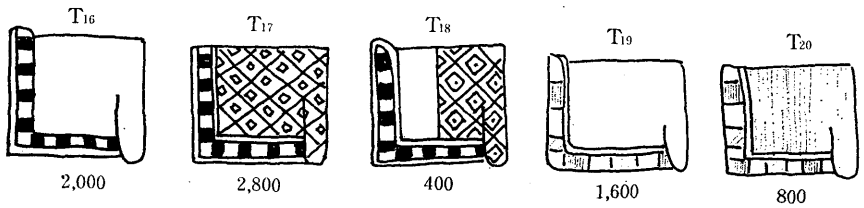
400

400

400

800

3,200



2,000

2,800

400

1,600

800

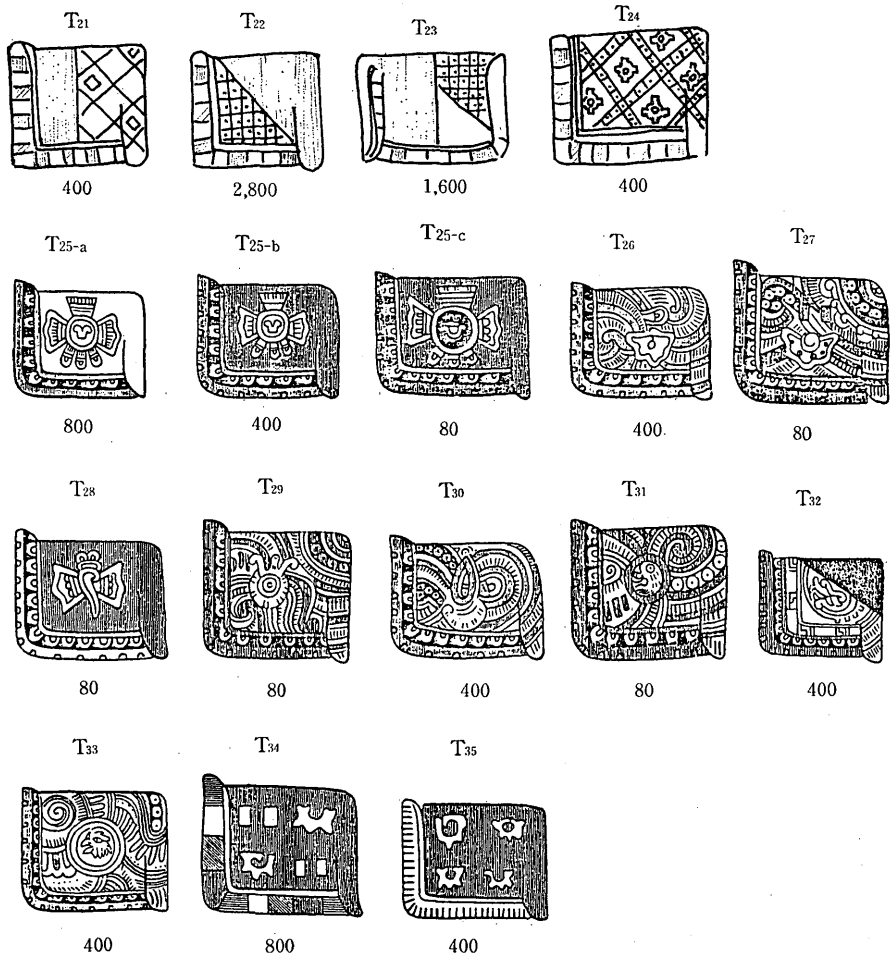


図3 「貢納表」の衣類
上段 表1の分類 下段 貢納枚数

の模様のあるもの (M₂) とが「貢納表」には記載されている。M₁ は、8つの貢納区から3,600着が納入されているが、Atlan 区のみが800着で、他の7貢納区は400着ずつである。M₂ は、Coaxtlahuacan 区から400着納入されている。フリーズ状模様はオアハカ地方の先スペイン期の建物の壁面にほどこされている「ミトラ型」モザイクと同一のモチーフとなっている。

女性用衣類では、上衣 (huipilli) だけの絵符で示されたもの (H₁)、スカート (cueitl) だけの絵符で示されたもの (H₂)、および両者の組み合さったもの (H₃) の3タイプが記載されている。H₂ と H₃ は、Xilotepec 区のみがそれぞれ400着ずつ貢

表1 「貢納表」マントの分類

柄 \ 縁	無 縁	有 縁			
		縞 目	多 色	眼 玉	羽 毛
無	Q _{1~3}	T ₁₆	T ₁₉	○	/
単 色	/	/	T ₂₀	○	/
縞 目	T _{1~6}	/	/	/	/
格 子	T ₇	T ₁₇	/	/	/
2 分	T ₈	T ₁₈	T _{21~23}	/	/
雷 紋	T ₉	/	/	/	/
オクイラン	T _{10~13}	/	/	/	/
斑 点	T ₁₄	/	/	/	/
シンボル	T ₁₅	○	T ₂₄	T _{25~34}	T ₃₅

番号は図3に対応 ○はCM IIIにあるもの

納している。H₂ は chicocueitl (不規則デザインのスカート), H₃ は cueitl xicalcolihqui (雷紋状ヒョウタン模様スカート) という注記がある。H₁ は細分類も可能ではあるが、13の貢納区から400着ずつ貢納されている。女性用衣類は、総計6,000着となる。

(3) 柄物織布類

tilmatli と総称される柄・縁飾り付のマント類のデザインは多種多様であり、その分類はかなり難しい。本稿では、縁飾りの部分と柄の部分に tilmatlí を分割し、表1のような分類で整理してみた。

まず、縁に関しては、無縁のものとは有縁のものに2分し、有縁のものは、(1)縞目のもの (tenuauanqui), (2)多色のもの (tentlapallo), (3)眼玉模様つきのもの (tenixyo), (4)羽毛つきのもの (teniuiyo) に下位区分できる⁶⁾。

一方、柄に関しては、(1)単色のもの、(2)縞目状のもの、(3)格子模様のもの (cacamolihqui), (4)斜2分型のもの (nacazminqui), (5)オクイラン風のもの (ocuiltecayo), (6)雷紋状のもの (colihqui), (7)斑点状のもの (ocelotl), (8)特定のシンボルをえがいたものに分類できる。(2)には黒色のもの (tillapatlavac), 赤色のもの (cozhuahuauanqui), 多色のもの (tlatlapali) がある。(4), (5), (6)にもいくつかの変異がある。また、(8)に関する下位分類は、第III章で詳述する。

柄物織布類の分類は、以上の縁と柄の分類を組み合わせた45より実際には少なくなる。この分類(表1)から「貢納表」の柄物織布類の貢納量を整理したものが、表2であ

6) サアグンの記録[CF VIII]によると、これ以外に、tentlayaualo(ラセン状縁), tenchilnauayo などがあげられている。

表2 衣 類 の 貢 納

貢納区	総単位	下帯	女性衣	無地布	柄 マ ン ト				貢納区	総単位	下帯	女性衣	無地布	柄 マ ン ト				
					W	X	Y	Z						W	X	Y	Z	
1									22	5		1	2	2T ₅				
2	2			2					23	1			1					
3	10	1	1	6			T _{19,22}		24	1			1					
4	10	1	1	5			3		25	1			1					
5	10	1	1	5			3		26	2			2					
6	10	1	1	6			T _{17,22}		27									
7	3			1			T _{16,23}		28	8	1	1		2T ₂	2T ₁₀	2T ₁₇		
8	6		1	2			3		29	3			2					T ₂₄
9	4			2			T _{16,21}		30	1			1					
10	4			2			T _{16,23}		31	7		1		2T ₅				4
11	6			4			2T ₂₂		32									
12	21		2			18	T ₂₃		33	4			4					
13	4			2			2T ₂₃		34	14.4		1	4	7		T _{16,18}		0.4
14	5			3			T ₁₁	T ₁₉	35	3			2	T ₂				
15	4			1			T _{12,13}		36	8				8				
16	3			3					37	38.6	1	1	16	19				1.6
17	1						T ₁₁		38	8	2		4					2T ₃₄
18	8		1	6					39	11	1	1	8			T ₁₉		
19	8			8					40	16			10	6T ₆				
20	11		1	5	2T ₅		2T ₁₇	T ₃₂	計	285	9	15	127	65	24	33	12	
21	22			6	16T ₄													
											3,600	6,000	50,800	26,000	9,600	13,200	4,800	
										114,000						53,600枚		

W : T₁—T₈ X : T₉—T₁₅
 Y : T₁₆—T₂₃ Z : T₂₄—T₃₅

1単位：400着 T_n は表1, 図3に準拠

る。40貢納区のうち、柄物織布類をいっさい貢納していないのは、12ある。このうち無地布も貢納していないのは3貢納区である。一貢納区あたりの貢納量は、400着から11,560着と差がみられる。また、柄物織布類のうちで、もっとも量が多い無縁縞目模様のもの (T₁₋₆) は22,800着も納入されているが、羽毛縁のもの (T₃₅) は400着しか納入されていない。また、総貢納量53,600着のうち3分の2に相当する36,000着は、無縁柄物織布となっている。柄物は、そのデザインによって価値が異なっていたことは、1554年の証言 [SCHOLLES and ADAMS 1957] からも推測できるが、シンボルの描かれたものや羽毛や眼玉模様の縁付きのものなど高価と思われるものの貢納量は相対的に少ないといえよう。

男女用衣服、無地布・柄物織布類といった衣類の貢納総量は、約11万着となる。また40貢納区のうち、Citlaltepec区、Tepeacac区、Xoconochco区の3貢納区は、

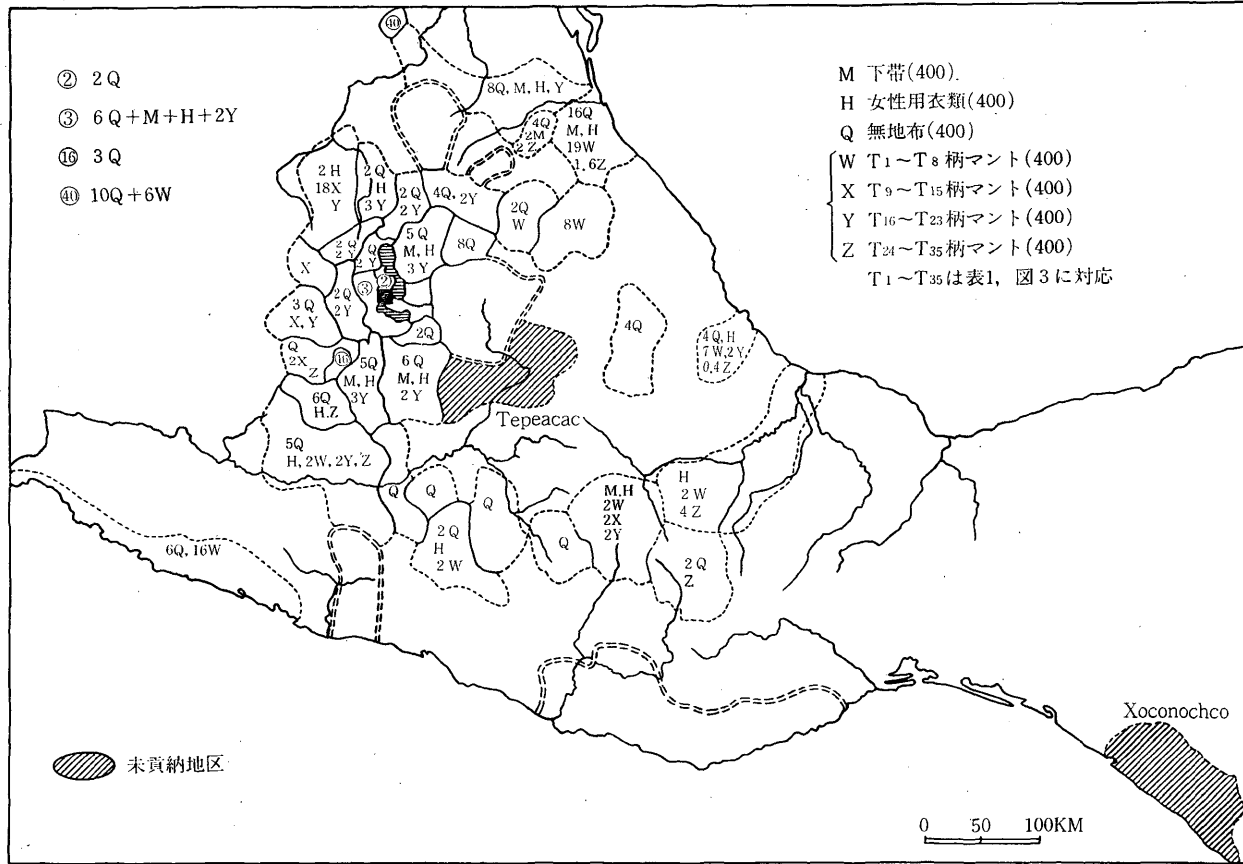


図4 衣類の貢納

衣類をいっさい貢納していない。その理由は、他の貢納品との組み合わせや貢納区の政治的・経済的状况と関連させて考えねばならないであろう⁷⁾。衣類のうち、女性用衣服が6,000着と全体の5%強でしかないこと、すなわち貢納された衣類の大部分が男性用であったことは留意すべきであろう。

2. 「貢納表」における武具類

「貢納表」における武具類は、大別して、戦士服と楯からなる。両者はつねに一組となって貢納されている。戦士服 (tlahuiztli)⁸⁾ は、頭に被ったり肩にかけた支柱に掛けたりする頭飾りと、胴着からなる。頭飾りは多様なものがあるが、胴着は長袖上下つなぎと羽毛飾り付のチュニック (ehuatl) の2タイプからなる。一般兵士の着用していた木綿製胴着 (ichcahuipilli) は「貢納表」には記載されていない [ANAWALT 1977]。

また武器としては、投槍棒 (atlatl) 4,000荷と弓矢材 (mitl) 8,000荷が Tepeacac 区から貢納されているのを除き、他の武器類⁹⁾ は記載されていない。

(1) 楯

chimalli とよばれる楯は、竹をマゲイ繊維でゆわえたものの表面に、羽毛などで様々のモチーフをえがいたものである。「貢納表」では7つのタイプの楯が貢納されている。このうち4つはその名称を同定することができる [SELER 1960; SULLIVAN 1972] (図5)。「ワステカ様式」楯 (quetzalcoexyo chimalli, CH₁)、雷紋状のモチーフのある楯 (quetzalxicalcolihqui, CH₂) のタイプが大多数をしめる。このほかくさび状モチーフの楯 (CH₃)、鷲の足爪のモチーフのある楯 (quauhtetepoyo, CH₄)、黄金楯 (teocuitlaxapo, CH₅)、および CH₁ に似た楯 (CH₆)、CH₃ に似た楯 (CH₇) がある。CH₅、CH₆、CH₇ はいづれも一式しか貢納されていない。

(2) 戦士服

胴着と頭飾りは一組で、戦士服とみなして考察をおこなう。胴着は、色を考慮しなければ、6つに分類できよう。上述したつなぎ服と ehuatl の2大タイプのうちでは、

7) Citlaltepec 区はメシカの辺境要塞への兵員派遣を担当しており [ZANTWIJK 1967]、Tepeacac 区はトラスカラ独立領主国との前線に位置し武器類の貢納品が多い。また貢納品のなかには、戦争捕虜も含まれていた。一方、Xoconochco 区は、地峡部を越えた地域にある飛地貢納区で、中米方面への前哨基地であった。

8) tlahuiztli は、スペイン語では armas (紋章)、insignas という語に訳されている [MOLINA 1970: 145; SIMÉON 1977: 695]。

9) 他の武器としては、黒曜石刃つきの棍棒 (maquahuitl)、弓 (tlauitloli)、棍棒 (quauholloli)、投石器 (tematlatl) などがある [SULLIVAN 1972]。

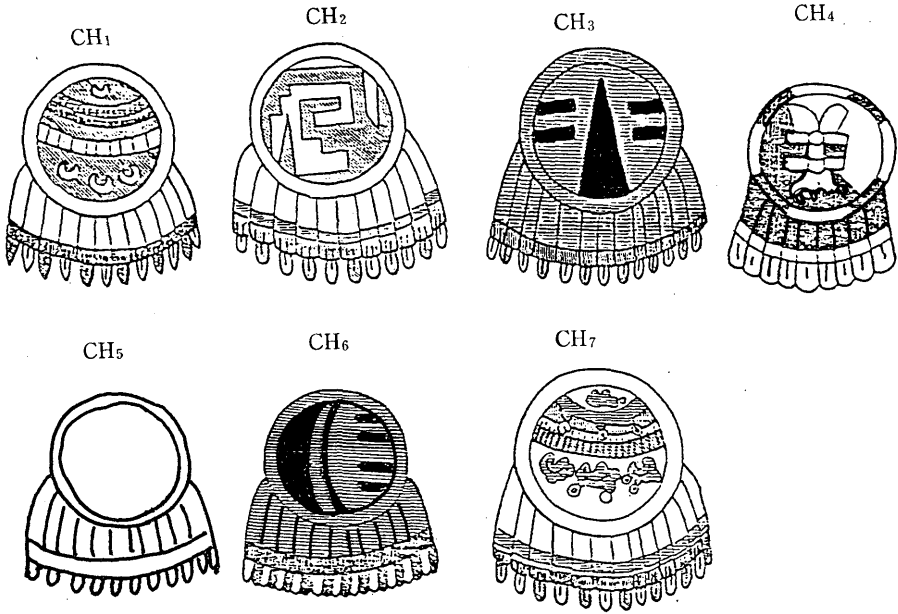


図5 「貢納表」記載の楯

前者が圧倒的に多い。つなぎ服は、無地のもの（黄・赤・青・緑）、ワステカ様式のもの（黄・赤・青・白）、ジャガーもようのもの（黄・赤・青・白）、心臓もようのもの（黄・赤・青・白）および2色組み合わせのもの（青/黄, 赤/白, 緑/赤, 緑/黄, 赤/黄）の5タイプがある。一方 ehuatl は赤と黄色のものがある¹⁰⁾。

一方、頭飾りに関しては、サアグンの記録などにより、その名称・用途をかなり正確に同定しうる [SELER 1960; SULLIVAN 1972; BRODA 1978a]。

胴着の分類は、頭飾りの分類とかなりの整合性をもつ。たとえば, tzizimitl は、つねに心臓のもようのある胴着、ジャガーの頭部はつねにジャガーもようの胴着と一対となっている。戦士服の分類は、頭飾りに準拠しておこなうのが合理的であろう。戦士服は12のタイプ (TL₁~12, 図6) に分類でき、その貢納量は表3のようになる。

戦士服のうち、「ワステカ様式」(cuxtecatl), 羽毛製頭飾り (patzactli), 羽毛製旗飾り (tzontli)¹¹⁾などは、100着を越す貢納量がある。また貢納区別にみれば、メシカ

10) MT と CM II では、色が異なっている例もある。また、ここにあげた5色（赤、黄、緑、青、白）は、4方位と中心という世界の5分割制と対応した色彩シンボリズムと関連すると思われる [REYES GARCÍA 1979]。

11) 羽毛製旗飾り (TL₉) については、Seler [1960] は tzontli, Broda [1978a: 122] は momoyactli というナワトル語をあてている。また patzactli と tzontli の差ははっきりしていない。

大領主の本拠地に近いほど、戦士服の貢納量や種類が多いという傾向がある。

楯と胴着と頭飾りは、基本的にはひとつのセットとして貢納されている。唯一の例外は Tochtepec 区である。この貢納区では、黄金楯と羽毛製頭飾りはあるが、胴着の欠落した武具の組み合わせがひとつある。

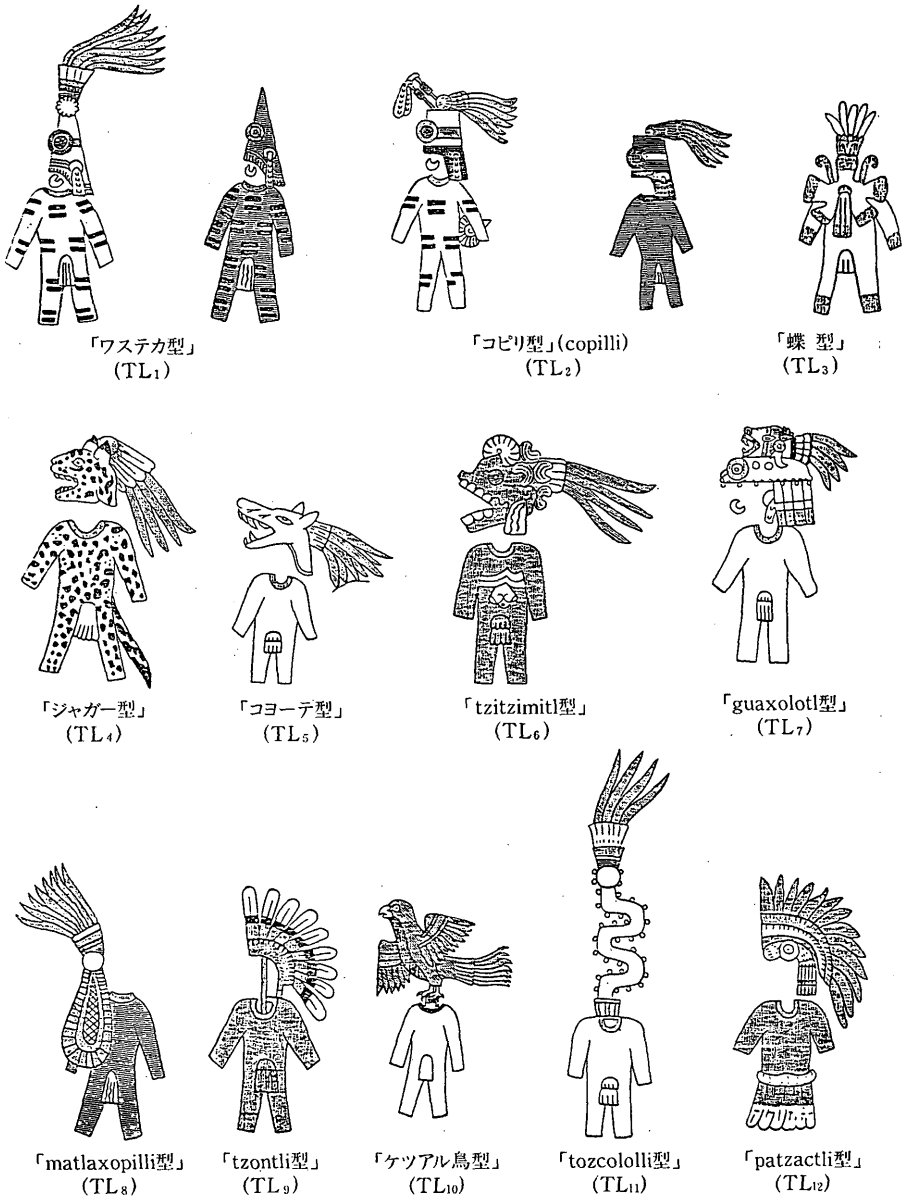


図6 「貢納表」記載の戦士服

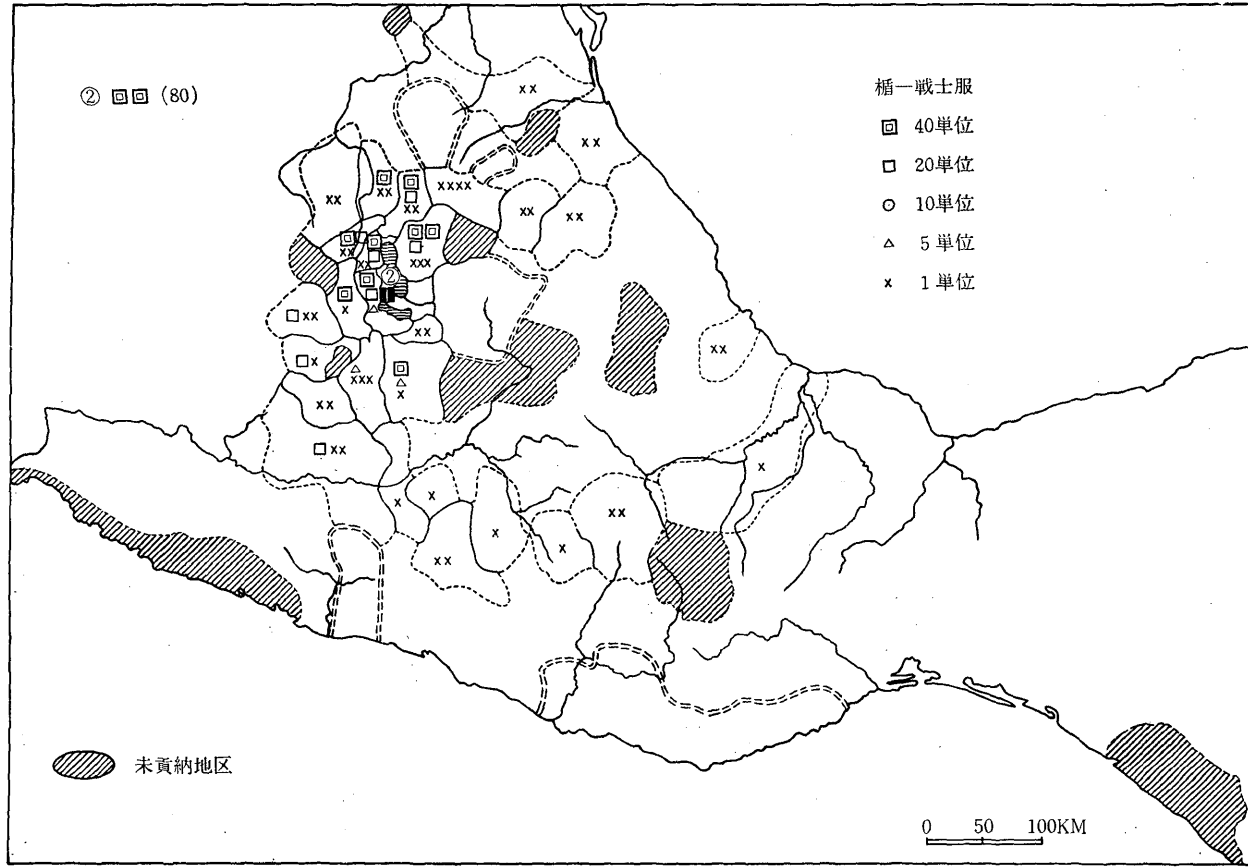


図7 武器類の貢納

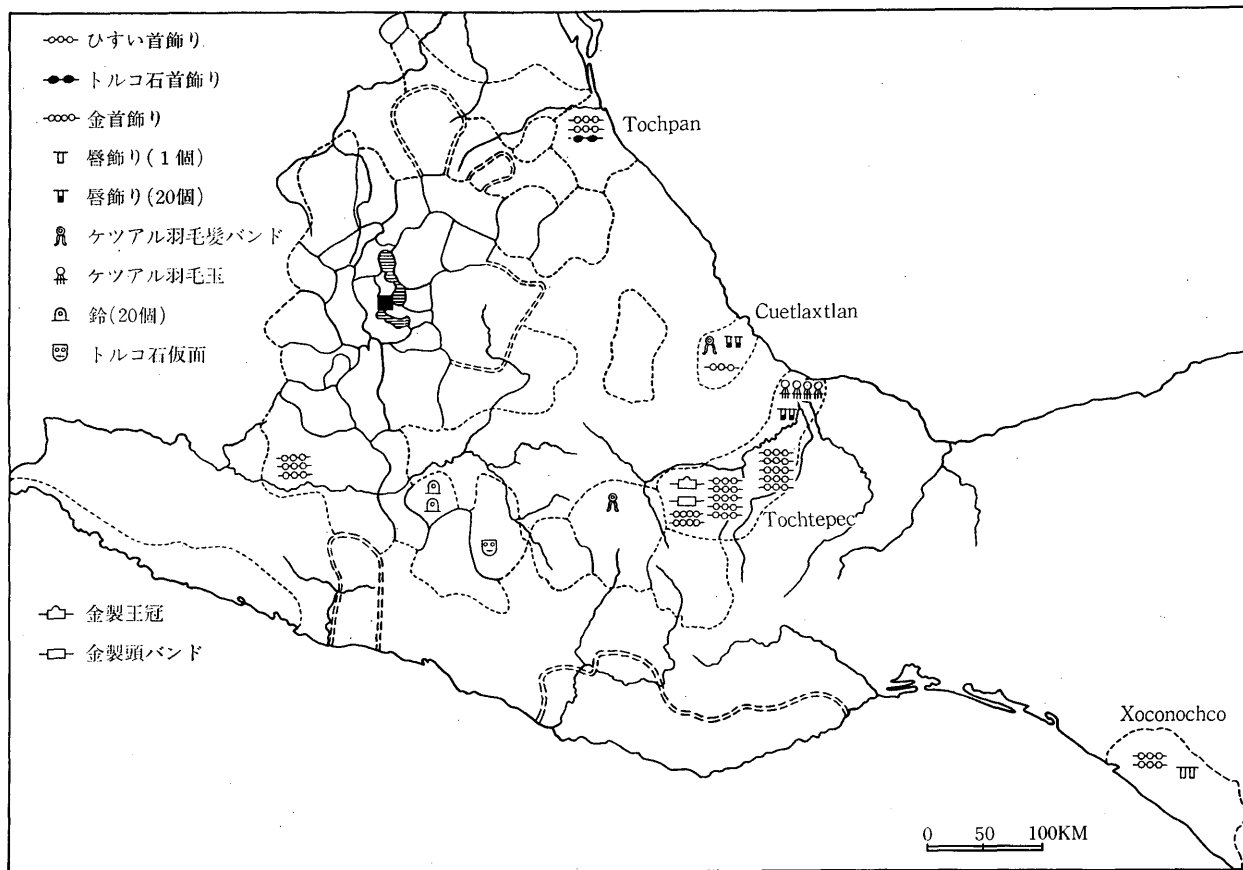


図8 装身具類の貢納

(tentetl, tençacatl), 頭バンド, 腕バンドなどが貢納されている。首飾りは, 緑石ひすい(chalchihuitl)¹²⁾, トルコ石, 金を材料としたもの, 唇飾り¹³⁾は水晶やこはくと金をつぎあわせたものが「貢納表」に記載されている。この種の装身具の貢納は, これらの貴金属・宝石類の産地をひかえている限定された貢納区に集中している。とりわけ, Tochtepec 区, Xoconochco 区, Cuetlaxtlan 区といった貢納区に集中していることは, これらの地域が後述する遠隔地交易の主要ルートに位置していたことと関連していたといえよう。そして, これらの貢納区は, 羽毛細工・宝石細工の原材料を貢納している地域でもある(図8)。

「貢納表」では上記以外にも, 祭式・儀礼の場で, 神像や参加者の装身具類として, 利用されていたであろうと思われるものが記載されている。Quiyauhteopan 区から貢納されている40の鈴(tetzilacatl)は, 王たちが踊りの時に着用していたと思われる[CF VIII: 8, 28; HG 1975: 459]。同様のことは, Yohualtepec 区から10個貢納されているトルコ石製の仮面(xayacatl)についてもいえよう。トルコ石製の仮面は王たちの踊りの時に着用されていたし[CF VIII: 8, 28; HG 1975: 459], 近年発掘調査の終わったテノチティトラン大神殿区から供物として発見された[MATOS MOGTEZUMA 1979]いわゆるオルメカ様式の仮面にこの仮面が対応する可能性もある。

Ⅱ. 威信財の生産・流通と職能集団

「貢納表」に記載された衣類, 武具類, 装身具類は, メシカ大領主のもとに集荷されたものの一部でしかない。このことは, サアグンの記録にある王侯・貴族の衣裳のリスト[CF VIII: 23-25, 27-28, 33-35, 47-48; III-1-(4) 参照]と「貢納表」を比較すれば一目瞭然である。サアグンの記録には「貢納表」で言及されていない多種多様の衣類, 武具類, 装身具類が記載されている。支配階級と関係したこれらの威信財は, 貢納以外にどのような回路を通じて集荷されたのであろうか。

1. 原材料の調達

メシカ大領主のもとへ, これらの威信財は完成品および原材料の形態で納入されて

12) chalchihuitl は, 必ずしもひすいのみを指示せず, 緑色トルコ石, 緑水晶, 玉ずい, 緑柱石などを含んでいた[AGOGINO 1977]。chalchihuitl の産地分布, そのシンボリズムについては Thouvenot [1982] 参照。

13) MT や CM II の図版では, 2種の唇飾り tentetl と tezçacatl のうち, 前者は独立して描かれ, 後者は quaxolotl, cuextecatl, teocuitlacopilli 型の戦士服とセットになって描かれている。

いた。後者は、「貢納表」において、木綿、染料、羽毛材、貴金属宝石の原石が記載されていることから証明できよう。これらの原材料の多くは生産地が特定の場所に限られていた。

(1) 木 綿

高度が2,000 m をこえ、“tierra fría” とよばれる寒冷地では、木綿の栽培は困難であった¹⁴⁾。このため中央高原に位置するプエブロは、“tierra templada” “tierra caliente” とよばれる低地域から木綿を調達する必要があった。それは、遠隔地交易および生産地の掌握を前提とする貢納という方式によっていた。この2つの回路が遮断されると、スペイン人侵入期の Tlaxcala のように木綿衣料が欠乏したであろう [コルテス 1980: 145-146]。

「貢納表」によるとメシカ大領主が木綿貢納区として間接的に掌握していたのは、Cihuatlan, Quauhtochco, Atlán, Ctzicoac の4貢納区であった。太平洋岸の Cihuatlan 区は、メキシコ湾岸の他の3貢納区とは若干種類の異なる「褐色木綿」(coyoichcatl) を納入していた。その貢納量は、それぞれ400荷、1600荷、1200荷、800荷であり総計2,000荷ということになる。木綿一荷(carga)は、約23 kg と推定されている [MOLINS FÁBREGA 1954/1955] から、46 t ということになる。また一荷は10枚の無地布に相当していたというから [SCHOLLES and ADAMS 1957: 55], 2万枚の無地布に相当することになる。

「貢納表」に記載されていないが、メキシコ盆地地域の住民を入植させることで、直接的に低地での木綿栽培を、メシカ大領主が掌握している例もある。一例は、アウイットル王(1486-1502年在位)が、西のタラスカに対する要塞として建設した Oztoman 要塞とその周辺のプエブロに入植させたメシカたちに、木綿畑をつくらせたことである [DURÁN 1967, II: 351-355]。また、トラスカラに対する要塞があった Cuauhquecholan, Atzitzuacan でも、メシカ入植者の木綿畑があったという [DURÁN 1967, II: 444]。

これに対し、アステカ帝国拡張期(15世紀後半)以降、メキシコ盆地に本拠をおいていた遠隔地交易商人(pochteca)が、木綿そのものを取り引きしていたことは確認できない。かれらは、木綿よりはるかに貴重な羽毛材や貴金属宝石類の取引に専心していたと思われる。また地域市場における木綿の取引はサアグンの記述 [CF X: 75;

14) 木綿の種類としては、白木綿のほか、茶木綿(coyoichcatl)、木木綿(quauhichcatl)があり、後者は pochotl (*Ceiba pentadra*) からとれたものである。16世紀の木綿栽培分布などについては Valjejo [1976] が詳しい。

HG 1975: 568-569] から推定できるが、取り引きされた木綿がメシカ大領主のもとに原料として集荷されていたとは考えにくい。

(2) 染料

多種多様な染料のうち¹⁵⁾「貢納表」に記載されているのは、cochinilla と tecoçahuitl とよばれる2種類の染料だけである。cochinilla は、厳密にはサボテンに寄生するかいがら虫の名称であり、それから採取する赤色染料は、nocheztli (サボテンの血) という¹⁶⁾。この染料は、オアハカ州北部からプエブラ州南部の特産物である。「貢納表」では、Coayxtlahuacan, Coyolapan, Tlachiquiauco といったオアハカ州北部に位置する貢納区から、それぞれ40袋、20袋、5袋、計65袋が納入されている。

一方、tecoçahuitl (黄色の石) は、鉱物性の顔料であるが、その成分は不明である。この染料は、バルサス川中流に位置する Tlalcoçauhtitlan 区から20壺納入されている。また「貢納表」に記載されていないものの、nacazcolotl (*Caesalpinia coriacea*, 黒色染料), zacatlaxcalli (*Cuscuta tintorea*, 黄色染料), ブラジルの木などの植物性染料が、「海岸地方」から貢納されていたという [DURÁN 1967, II: 207]。一方、こうした染料のうち、cochinilla は明ばんなどとともに、遠隔地交易商人によって取り引きされていた [DURÁN 1967, II: 185; CF IX: 18; HG 1957: 498]。

(3) 羽毛材

熱帯雨林に生息する鳥類の色あざやかな羽毛材は、メキシコの中央高原の支配者層が、その確保に執心していた貴重財であった。羽毛材の取得は、初期は遠隔地交易商人の手に委ねられていたといえよう。かれらの取り扱った品目リストがサアグンの記録にあるが、14世紀後半には3種の羽毛材のみが、「交易品」(pochtecatitlique) とみなされていたという。15世紀前半に初めて、ケツアル鳥羽毛が取り引きされ、アステカの勢力がテワンテペク地峡部に及ぶ15世紀末になると、大量の羽毛が遠隔地交易商人によって、メキシコ盆地の諸領主のもとにもたらされた [CF IX: 1-2; HG 1957: 489-490]。

アステカは、羽毛の産地を征服し貢納区として編成することによっても、羽毛材を確保していく。鳥類の羽毛材は、6つの貢納区から納入されている。羽毛材の種類も多様であるが、ケツアル鳥 (quetzalli) の青緑羽毛材がもっとも多い。このほか、青

15) サアグンの記録 [CF X: 239-245] には、動物性染料4種、植物性染料11種、鉱物染料9種が記載されている。

16) スペイン人の年代記では grana と記されている。この染料は植民地期に厳しい統制栽培をされ続けた [DALHGREN DE JORDAN 1963]。

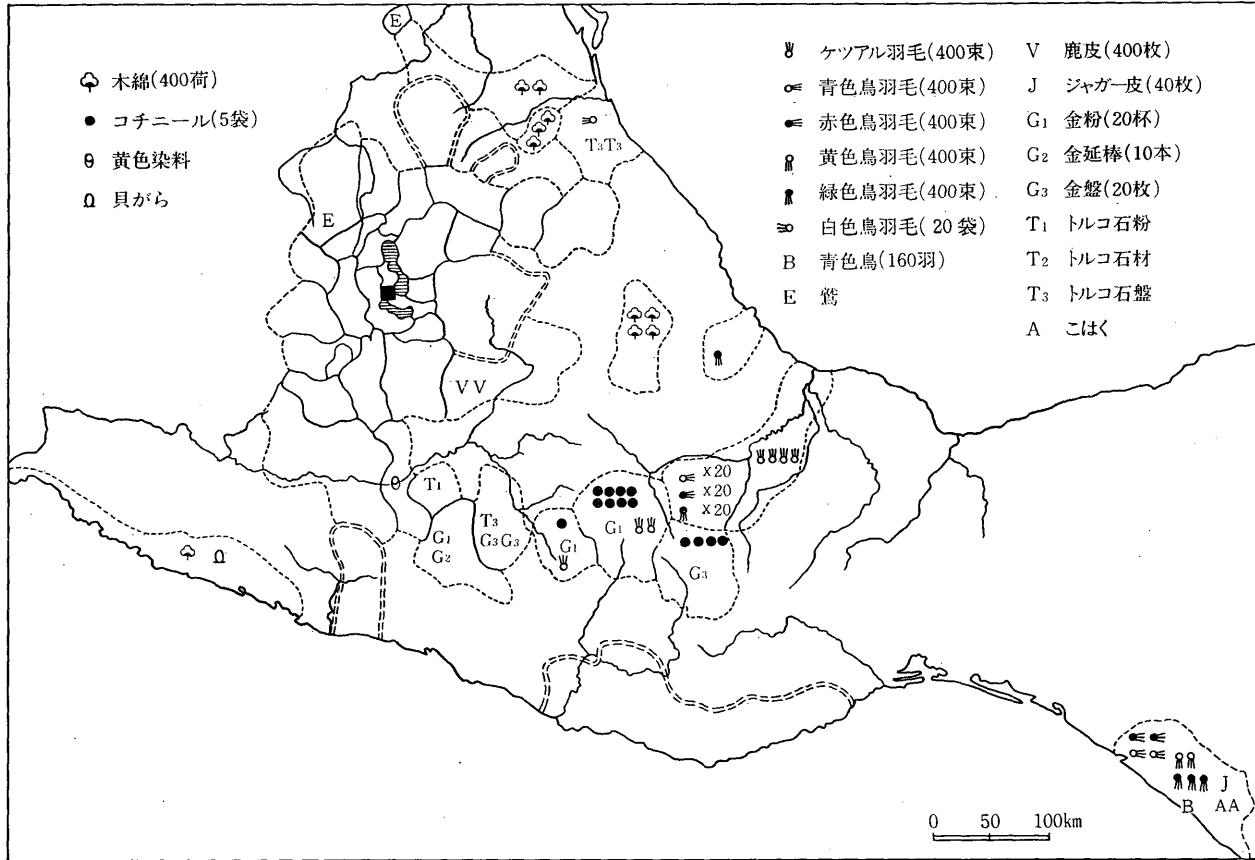


図9 原材料の貢納

色の鳥 (xiuhtototl), 赤色の鳥 (tlauhquechol), 黄色の鳥 (toztli), 緑色の鳥 (tzinitztcan), および白色の鳥の羽毛材が「貢納表」に記載されている¹⁷⁾。羽毛材の貢納量は、図9に示した。

羽毛材の形態ではなく、鳥そのものを貢納していた貢納区がある。Xoconochco区からは、160羽の xiuhtototl, Xilotepec 区, Oxitapan 区からは、鷺が納入されている。後者は、メシカ大領主の鳥獣園で飼育されたと推定できる。生きたままの鳥の貢納は、年代記でも言及されており [DURÁN 1967, II: 206], 鳥獣園で飼育されていた鳥類の羽毛は、羽毛製品に加工されていた [CF VIII: 45]。

鳥類の羽毛とは異なるが、Tepeacac 区から800枚の鹿皮, Xoconochco 区から40枚のジャガーの皮が貢納されている。これらも羽毛細工師によって加工された可能性がある。

(4) 貴金属・宝石の原石

「貢納表」では、金、トルコ石、こはくが原材料として記載されている。金 (teocuitlatl coztic) は、延べ棒、円盤、金粉の形で貢納されている。金の貢納区はオアハカ州北西部からゲレロ州北東部に集中している。金粉は、Tlapan, Coayxtlahuacan, Tlachquiauco 区から20杯 (xicalli), 円盤は、Yoaltepec, Coyolopan 区からそれぞれ40, 20枚, 延べ棒は Tlapan 区から10本貢納されている。

トルコ石は、Yoaltepec 区から石材一荷, Coayxtlahuacan 区から石盤2枚, Quiauhteopan 区から中粒鉱石一荷の形で貢納されている。この3貢納区はいずれもバルサス川上流域にある。こはく (apozonalli) は、Tochtepec 区から100枚, Xoconochco 区から石材2本の形で貢納されている。

また、Cihuatlan 区からは、800個の貝殻 (tapachtli, *Spondylus* sp.) が貢納されている。この貝殻は、赤・白・緑色をしており、首飾りや腕輪、さらには鏡として加工されていた [CF XI: 230]。

以上の貴金属・宝石製品の原材料は、貢納という形態だけでなく、遠隔地交易によっても集荷されていた。アステカ期の遠隔地交易商人は、タバスコ州にあった Xicalango という交易港 (port of trade) で、ひすい、トルコ石、貝殻を入手していた [CF IX: 17-19; HG 1975: 497-499]。また、これらの稀少財が紀元前からメソアメリカで、広範な遠距離交換 (long distance exchange) のネットワークをつ

17) 以上の鳥類は、おおよそ次のように同定されている。ケツアル鳥: *Pharomachrus mosino*, 青色鳥: *Cotinga amabilis*, 赤色鳥: *Ajaia ajaja*, 黄色鳥: *Amazona ochrocephala*, 緑色鳥: *Trogon mexicanus* [CF X: 19-23]。

くりあげていたことは、1970年以降の研究によって明らかになった [SPENCE and PARSONS 1972; HAMMOND *et al.* 1977; WEIGAND, HARBOTTLE and SAYRE 1977; PIRES-FERREIRA 1978a, 1978b]。

2. 遠隔地交易商人と王権

メシカ大領主のもとに集荷される威信財の回路が、貢納と遠隔地交易という2つの形態をとっていることは、前節で一定程度、明らかにできた。貢納と遠隔地交易の関係については、遠隔地交易拠点を征服により掌握することにより貢納体制に編入するという傾向を指摘できる。Duránの年代記においても、Tepeacac, Cuertlaxtlan, Coayxtlahuacanの征服が、このような過程であったとのべられている [DURÁN 1967, II: 153-162, 185-195, 197-203]。しかし貢納体制下にある地域では、遠隔地交易が衰退あるいは停止していったという仮説 [CHAPMAN 1957] が、承認できないことはBerdanの指摘どおりである [BERDAN 1978]。本節では、アステカ期における遠隔地交易商人と王権との関係について説明をおこなう。

(1) 遠隔地交易商人

アステカの遠隔地交易商人に関しては、サアグンの記録 [CF IX; HG 1975: 489-533] が基本史料となる。アステカの遠隔地交易に従事している商人集団ポチテカに関する研究は、Acosta Saignesのもの [ACOSTA SAIGNES 1945] を嚆矢とするが、これが注目を浴びたのはKarl Polanyiの編さんした論集において、Chapmanが「交易港」(port of trade)の概念とともに紹介してからであろう [CHAPMAN 1957]。

ポチテカ *pochteca* は、地域市場で自己生産物を売る商人 (*tlanamacac*) とは、明確に異なる社会集団である。この集団の起源は不明であるが、サアグンの記録によれば、テノチティトランに北接する市場都市トラテロルコでは、初代領主 *Quaquapitzáuc* (1350-1409年在位)の時代からすでにポチテカが存在していた [CF IX: 1; HG 1975: 489]。トラテロルコのポチテカは、2人の統率者 (*pochtecatlatoque*) によって代表されていた。こうしたポチテカ集団は、テノチティトランとトラテロルコだけでなくメキシコ盆地の12の主要なプエブロに居住していた [DURÁN 1967, II: 185; CF IX: 17, 48-49]。

これらの12のプエブロのポチテカがすべて対等の特権を保有していたわけではない。いわゆるアステカ帝国の版図を越えた地域で交易活動に従事できたのは、トラテロルコ、テノチティトランのほか、Huitzilopochco, Azcapotzalco, Quauhtitlanの3つ

のプエブロのポチテカに限定されていた [CF VIII: 17, 49; HG 1975: 497, 508]。このなかには、アステカ帝国の実体である3都市同盟の構成プエブロである Texcoco と Tlacopan が含まれていない。他の2つのプエブロのポチテカが排除されていることは、メシカ大領主とポチテカの関係を示唆しているといえよう。

サアグンは、帝都メシコ（テノチティトランとトラテロルコの総称）のポチテカは、7つのカルプりに居住するとのべている [CF IX: 12; HG 1975: 495]。Zantwijk は、7つのカルプリのうち、Acxotlán と Pochtlán が優勢なカルプリであると推定している [ZANTWIJK 1970]。ポチテカのカルプリは、内婚規制により、他のアステカ住民とは厳格に区別されていたらしい。Acxotlán あるいは Pochtlán というカルプリ名は、Chalco や Amaquemecan [CHIMALPAHIN 1965: 43, 47] あるいは Huexotzinco などにもある。Huexotzinco にあった Santa María Acxotla の場合は、1560年のセンサスで、349名の納税者中309名が商人 (tequachcauhtl) として登録されている [DYCKERHOFF and PREM 1976]。

ポチテカ集団の内容も、その職務により社会的に分化していた。アステカの版図を越えた前線地域に赴き交易にたずさわる人々は、oztomeca とよばれた。かれらの中には、前線地域に潜入し、その地域の住民の言語・習慣をマスターし、地域の情報を収集するスパイもどきの活動をするもの (nahualoztomeca) もいた。かれらが捕束されたことを口実として、メシカ大領主は征服にのり出していた [CF VIII: 50-69, IX: 3-8, 21-25]。こうした前線商人の下には、荷担夫 (tlamama) たちも組織されていた¹⁸⁾。ポチテカ集団のなかにはアステカの諸祭式で生贄として殺されたり、家内労働に従事する奴隷を専門的に取引する奴隷業者 (tecoani, tealtiani) もいた。これらのポチテカ集団を統率するのが、pochtecatlailotlac あるいは acxotécatl という称号をもつ統率者であった [CF X: 59-60]。

王権との関係で興味深いのは、ポチテカのなかには tecunenenuqui とよばれるものがいたことである¹⁹⁾。tecunenenuqui は tecuhtli (領主) と nenenqui (旅行者) の2語の合成語で、領主の委託を受けて、領主の財を地峡部の諸領主の財と交換する役目を負っていた [CF IX: 6-8, 17-19]。

(2) 王の財と交易商人の財

tecunenenuqui は、メシカ大領主アウィツォトル王から下賜された無地布1600枚を

18) 荷担夫には、下層商人、雇われた者のほか、少年たちもいた。かれらは、交換財ではなく、食器、ひょうたん類を運んだ [CF IX: 14-15]。

19) tecunenenuqui はポチテカ内の一定の階層を指示するものでなく、特権を与えられた上層商人と考えればよい。

元手として、地峡部に赴いたという。この無地布 (quachtli) を元手として、王侯用の柄物織布 (tlatocatilmatli) を購入したという。王侯用織布としては、(イ)杯型モチーフで羽毛付のマント、(ロ)鷲の頭のモチーフで羽毛縞目縁飾りつきマント、(ハ)王侯用下帯、(ニ)刺繍つき女性衣類があった ([CF IX: 8,17]。表4 A欄参照)。(イ)は「貢納表」において Tochtepec 区と Tochpan 区から貢納されているマントと、(ロ)は Ocuilan 区から貢納されているマントとモチーフが似ていたと推定できる。これらの王侯用衣類は、トラテロルコの大市場あるいは、交易商人が通過した地区の市場で入手したと推定しうる。

このメシカ大領主の財は地峡部以遠の諸領主の次のような財と交換される。羽毛材としては、(イ)ケツアル鳥、(ロ)緑トウガラシ色の鳥、(ハ)青色の鳥、(ニ)緑色の鳥、(ホ)赤色の鳥、(ヘ)黄色の鳥、(ト)ひすい色の鳥などの羽毛がある。原石としては、ひすいやトルコ石、さらには多彩な色の貝殻、べっ甲やジャガーの皮などもあげられ

表4 ポチテカの取扱った財

<p>A 王の財 (移出)</p> <p>王用マント (T₂₅, T₃₃) 王用下帯 王女用衣類 (H₃)</p>	<p>B 王の財 (移入)</p> <p>ケツアル羽毛, 青・緑・赤・黄色羽毛 ひすい, 緑色黒曜石, 黒縁ひすい トルコ石モザイク楯, 赤・黄色貝殻 べっ甲板, 黒ジャガー皮</p>
<p>C 王からポチテカへの報賞</p> <p>蝶型縁付マント 杯型マント (T₂₅) 花柄マント 石盤もようマント, 赤色下帯 兎皮マント トウモロコシ・豆・チア カヌー1ばい分</p>	<p>D ポチテカから王への上納</p> <p>ケツアル羽毛頭飾り・旗印, 緑羽毛旗印 羽毛製胴着, 羽毛製腕輪 トルコ石モザイク楯 金製鼻飾り, 耳飾り</p>
<p>E ポチテカの財 (移出)</p> <p>金冠, 金製額飾り } ⇒ 王 金唇飾, 金首飾り } 金製つむうけ, 金・水晶耳飾り “奴隸” (tlatlacoti, 女・少年) 黒曜石・銅製耳飾り } 黒曜石ナイフ・矢じり } ⇒ 平民 針, 貝殻, コチニール } 香・葉草, 明ばん }</p>	<p>F ポチテカの祭りで消費される財</p> <p>マント (花, 網, 巻貝 etc) 800~1200 } 貴族用 下帯 (コヨーテ, 網 etc) 400 } 女性用衣類 (心臓, 巻貝, 鷲 etc) } トウモロコシ, 豆, チア, アトーレ, トマト トウガラシ, 塩 40-60荷, カカオ 20袋 七面鳥 80-100羽, 犬 20-40匹 チョコレートこね棒 200-400本, 鉢 かご, 土器, 皿 薪炭, 飲料水, カヌー 3~4せき分</p>

ている [CF IX: 17-19], 表 4 B 欄参照)。メシカ大領主の財と交換されたものは、すべて原材料であったことが特徴といえよう。その構成は、「貢納表」に記載されている Xoconochco 貢納区の貢納品構成に近似している。

上述の財をメシカ大領主のもとに持ち帰ることにより、tecunenenqui は諸種の報賞をえる。すなわち、乾燥トウモロコシとインゲン豆をそれぞれカヌー1せき分と若干のチアといった食料だけでなく、兎皮製のマント一束と何枚もの衣類が下賜されていた。衣類は、(イ)蝶、(ロ)杯型、(ハ)石製円盤、(ニ)赤色の花をデザインしたマント類と、赤色の下帯である ([CF IX: 5-6], 表 4 C 欄)。一方、地峡部などからtecunenenqui によって持ち帰られた原材料は、メシコ大領主の抱えている羽毛細工、宝石細工、金属細工の職能集団のもとに届いたものと思われる。

王の財は、ポチテカが取り扱った財のごく一部でしかない。ポチテカは、王から下賜された財とは別途に、自前の財を大量に扱っていた。ポチテカは、交易活動をおこなう地域の社会構成に対応した財を中央高原から運搬している。地域の領主階級むけの装身具類、地域の平民階層の装身具類や道具類、そして奴隷 (tlatlacoti) などそのリストのなかに含まれている ([CF IX: 8, 17-18], 表 4 E 欄)。表のうち、とりわけ興味をひくのは、黒曜石製ナイフやカミソリ、ぬい針 (huitzmallotl), cochinitilla, 明ばん、薬草といった生活必需品が言及されていることである。これは、ポチテカが、交易拠点に開設された地域市場での取引にまで参加していたことを示す²⁰⁾。

(3) 王権による遠隔地交易商人の統制

アステカ拡張期におけるポチテカとメシカ大領主の関係は、いわば二人三脚のようなものであった。遠隔地交易 → 征服 → 貢納体制への編入という過程で、両者間の矛盾が顕在化することは少なかった。しかし、「地上のあらゆるもの」(tlalticpacayotl) を手にしえた富裕ポチテカに対する王権の統制が皆無であったわけではない。王権による統制は、モクテスマ II 世時代 (1502-1520 年在位) に強化されていく [VÁZQUEZ CHAMORRO 1981]。

ポチテカは、かれら固有の神々を祀り、独自の法体系で裁判をおこなう特権をメシカ大領主から認められていた。しかし、日常生活における挙動に関しては、かなりの制限が加えられている。ポチテカの中核である oztomeca の日常着は、平民と同じマガイ製のマントであり、自らの富裕さを誇示することは差し控えられていた²¹⁾。こう

20) Chapman らの「交易港」仮説では、遠隔地商人が、下位レベルの地域市場に参与していたことについては無視されている。

21) 遠隔地交易の出発・帰還はいずれも夜間におこなわれている。

した謹厳な生活様式を乱すものは、メシカ大領主によって処刑され、接収された財は、戦士階級の一部を養うためにまわされることもあった [CF IX: 31-32; HG 1975: 503]。

ポチテカが富裕さを誇示できたのは、メシカの支配階級も参加して挙行される祭式の場合に限定されていた。祭式の場合のみ、ポチテカの統率者たちは、金とこはくでできた唇飾りという本来は支配階級にのみ許された装身具を身にまとえた²²⁾ [CF IX: 23-24; HG 1975: 500]。また祭式においては、ポチテカの財が、大規模に支配階級の間に贈与されていた。サアグンによると、800~1,200枚のマント類と400の下帯が、そのために用意され、「支配者の家系に属するすべての貴族 (tlaçopipiltin)²³⁾」に配分された ([CF IX: 47], 表4 F欄)。

このことから類推できるように、王権は王の財を投入することによって、遠隔地から威信財の原材料を確保しただけでない。ポチテカに対し、王権を演出するイデオロギ的装置である数々の威信財の使用を制限することで、実質的に大量の威信財を自らのもとに集荷することができた。

3. 羽毛細工師と貴金属・宝石細工師

前節で紹介した遠隔地交易商人が持ち帰ったり、貢納という回路で、メシカ大領主のもとに集荷された原材料は、「工芸人」(toltecatl)の手で、華美な衣類・武具類・装身具類に加工される。「工芸人」を指示するトルテカは tullan (芦の繁茂する所=都市)の住人という意味である。アステカにとって、トルテカはあらゆる先進的技術・知識の発明者であり、その伝承者を意味していた [CF X: 167-170; HG 1975: 595-598]。

(1) 羽毛細工師

諸種の鳥類の羽毛を細工して、華麗な楯や戦士服などを作る人々はアマンテカ (amanteca) とよばれた。これはかれらの属するカルプリの名称にちなむ。かれらの居住区は、ポチテカの居住区と通りをはさんで隣接するのがつねであった²⁴⁾ [CF

22) ポチテカの集住するトラテロルコには、メシカ大領主に任命された軍事的統治者 (quauh-tlaoque) がいた。かれらは6種の唇飾りを着用できたが、ポチテカの統率者たちは2種だけに制限されている。

23) ここでは、tlacatéccatl, tlaçochcalcatl, quauhnochtli, quáchic, otomí, mixcootlailotlac, ezauacatl, maçatecatl, tillancalqui, ticocyauácatl, tezcacoacatl, tocuiltecatl, atenpanecatl および tlaçochcalcatl tecuhtli という15の称号・役職名があがっている。

24) ポチテカの守護神 Yacatecuhtli の神殿と、羽毛細工師の守護神のひとつ Coyotlinahual の神殿は並んで建っていたらしい。

IX: 88-89; HG 1975: 519]。これは、羽毛細工の原材料の大部分が、ポチテカによって調達されていたことから当然といえる。

モクテスマⅡ世は、王侯用の羽毛製品をつくる羽毛細工師をテノチティランとトラテロルコから選びだし、特定の家に居住させたという [CF IX: 91; HG 1975: 530]。そのうちひとつは、貴金属細工師、宝石細工師、絵師、石木彫刻師などが居住していたという鳥類園 (totocalli) であろう [CF VIII: 45; HG 1975: 468]。かれらは、メシカの守護神ウィチロポチトリを飾る「神の衣裳」(tequemiltl) を専門につくっていた。またモクテスマⅡ世が敵国や服属した地域の領主に贈る衣裳 (tlatqui) をつくるものは「王宮羽毛細工師」(tecpan amanteca) とよばれていた。さらにモクテスマⅡ世の管財倉庫で、モクテスマⅡ世の舞踊用衣裳をつくるもの (calpixcan amanteca) もいた [CF IX: 91; HG 1975: 530]。

サアグンは、こうした王侯用の楯や戦士服をつくる羽毛細工師以外に、「並」の楯や戦士服などをつくる羽毛細工師 (calla amanteca) もいたことを指摘している [CF IX: 91-92; HG 1975: 530]。これは、階梯の底辺にいる戦士たち用の楯や戦士服をつくる羽毛細工師であった。「高級」な羽毛細工と「並」の羽毛細工では職人の位階が異なるだけでなく、羽毛材の質や使用する道具も異なっていた。「並」の羽毛材としては、アオサギ、七面鳥、アヒルなどがあり、それらは銅製のナイフではなく黒曜石のナイフで切られていたという [CF IX: 89-91]。

(2) 貴金属・宝石細工師

サアグンは金属製作・加工に従事する職人が多岐にわたっていたことをのべている [CF IX: 69-78; HG 1975: 520; LEÓN-PORTILLA 1978]。先スペイン期には主に金と銅が加工されていたが、王権と結びついた威信財としての装身具に使用されたのは金であった。金細工師 (teucuitlaoaque) は、その加工工程に従って、鋳物師 (teucuitlapitzque)、打ち延べ師 (teucuitlatzotzonque) および仕上師 (teucuitlatliani) に分化していた。かれらも一定の居住区に集住していたと思われる、その候補地としては、かれらの守護神 Totec の神殿があった Yopico 地区を指摘できる [CF IX: 69; HG 1975: 515]。

原材料である金粉を集荷した回路として、貢納と遠隔地交易のいずれの比重が大きかったかは不明である。金細工師は、羽毛細工師のデザインにもとづき、首飾りや様々な装身具をつくった [CF IX: 75-76]。

「貢納表」に記載されている金製唇飾り、耳飾りおよび黄金楯は、かれらの守護神 Totec の装身具でもある [CF IX: 69]。

一方、宝石細工師 (tlatecque) には、メキシコ盆地の南部に位置するショチミルコ (Xochimilco) を故地であるとする伝承がある。かれらが造るものとしては、2種の唇飾り (tezçacatl/tentetl), 耳飾り (nacochtli), 首飾り (cozcatl), 腕輪 (macuextli) があり、水晶、紫水晶、緑色石、黒曜石、ひすい、トルコ石、オパール (huitzitziltecpatl), 血玉ずい (eztecpatl), こはくなどが原材料となっていた [CF IX: 79-92; HG 1975: 524-526]。これらの原石に穴をあけ研磨するための石材や砂は、特定の産地のものが利用されていた。これらの原材料も、金粉と類似した回路によって、かれらの手許まで到達したものと思われる。

これまでの記述で明らかになった衣類・武具類・装身具類といった威信財とその原材料のメシカ大領主のもとへの集荷回路を示せば図10のようになるだろう。図に示した集荷回路は、原材料である木綿と、完成品としての無地布やマント類に関する集荷回路としては適切でない。それは、織物に従事した職業集団が、羽毛細工師、貴金属・宝石細工師のような同業者集団を構成していなかったからである。糸つむぎ人 (tzauhqui) および機織人 (hiquitqui) が女性であったこと [CF X: 35-36] は確実ではあるが、インカにおける「処女の館」(aqlla huasi) のごとき組織の存在

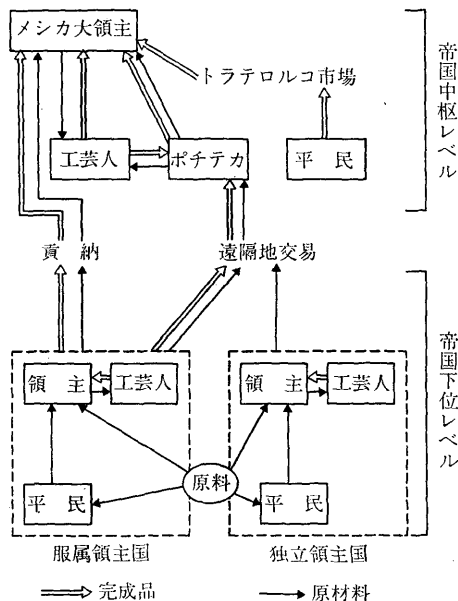


図10 威信財とその原材料の集荷回路

[MURRA 1962] は確認できない。無地布 (quachtli) が、遠隔地交易や地域市場に上廻っていたことは前述したように確実であるが、柄物マントについてはわからない点が多い。

Ⅲ. 威信財の再分配と王権

貢納や遠隔地交易によってメシカ大領主のもとに集荷された威信財の再分配はいかなる基準で、どのような場でおこなわれたのであろうか。前章までで紹介した衣類・武器類・装身具類は、いずれも特定の社会階層に指定された威信財であり、その着用は厳しい規制のもとにあった。アステカの人々は、その社会の階梯を上昇することにより、より華美な「衣裳」を身にまとい、自己の位置を誇示することができた。

1. 「衣裳」の序列

アステカ社会においては、平民と支配者階級の差異を強化するための規制が存在していた。この規制や実態を本節で記述する。

(1) 「衣裳」着用規制

アステカの慣習法については、いくつかの年代記や報告書に記載がある [GARIBAY (ed.) 1973: 73-76; ソリタ 1982: 63-98]。そのなかで、Durán の年代記はモクテスマ I 世 (1440-69年在位) が定めた法令などについて詳細な記述を残している [DURÁN 1967, II: 211-214]。そのなかに、メシカ大領主、有力領主、上級戦士、一般兵士、平民が身体にまとえるものに関する規定がある。これらをまとめたのが、表 5 である²⁵⁾。平民に対する木綿製マント着用の禁止、金・宝石・高級羽毛製の装身具類の大領主、有力領主のみの使用、戦士・兵士階梯による「制服」の差などがはっきりと示されている。モクテスマ II 世期には、この規定がより細くなり、大領主の系譜に属するものと、そうでないものが峻別されるようになった [DURÁN 1967, II: 403-406; TEZOZÓMOC 1975: 578] とと思われる。

この種の規定は、死者の埋葬品の差異からも知りうる。領主 (tlatoni) や貴族 (pipiltin) の死体の口にはひすい (chalchfhuatl) がはめ込まれるのに対し、平民

25) この種の規定が以後も存続していたことは、年代記のより後半の部分でも言及されている [TOVAR 1972: 67, 68; TEZOZÓMOC 1975: 495; DURÁN 1976, II: 443]。詳細は Anawalt [1980] 参照。

表5 「衣 裳」 規 定

	大領主(王)	有力領主	有力戦士	戦士	平民
頭 部	xiuhuitzolli (金王冠)	(xiuhuitzolli)	(xiuhuitzolli)	不 可	不 可
	quetzallalpiloni (羽毛髪束)	quetzallalpiloni	temillotl	不 可	不 可
履 物	ジャガー皮 サンダル	中級サンダル	サンダル	不 可	不 可
マント	高級マント	上級マント	中級マント	木綿マント	エネケン製マント
装身具	金製, ひすい	同 左	骨, 木, 貝	土製, 石製	不 可
羽毛飾	ケツアル鳥	同 左	鷲, オウム	不 可	不 可
他の特権	カカオ・酒・人 肉摂取, 免租, 多妻, 王宮踊	同 左			

(macchualtin) の口にはめ込まれるのは緑色の石 (texoxoctli) が黒曜石であった [CF III: 43; HG 1975: 205]。また *Códice Tudela* [1980: folio 55-60] と *Codex Magliabechiano* [1970: folio 66-72] には、領主 (cacique, señor)・貴族 (principal), 平民 (hombre común), 商人の埋葬の様子が描かれているが、副葬品に明確な差異がある。死者の安置される座も、領主は声で織られた王座 (petlatl-icpalli), 平民は背もたれなしのゴザ, 商人は羽毛つきの敷物となっている。メシカ大領主の葬式の情景を描いている Tovar [1972: 284-287] や Durán [1967, II: lám 36, 49] のさし絵では、ケツアル鳥羽毛製頭飾り, ひすいの首飾りが副葬されている。

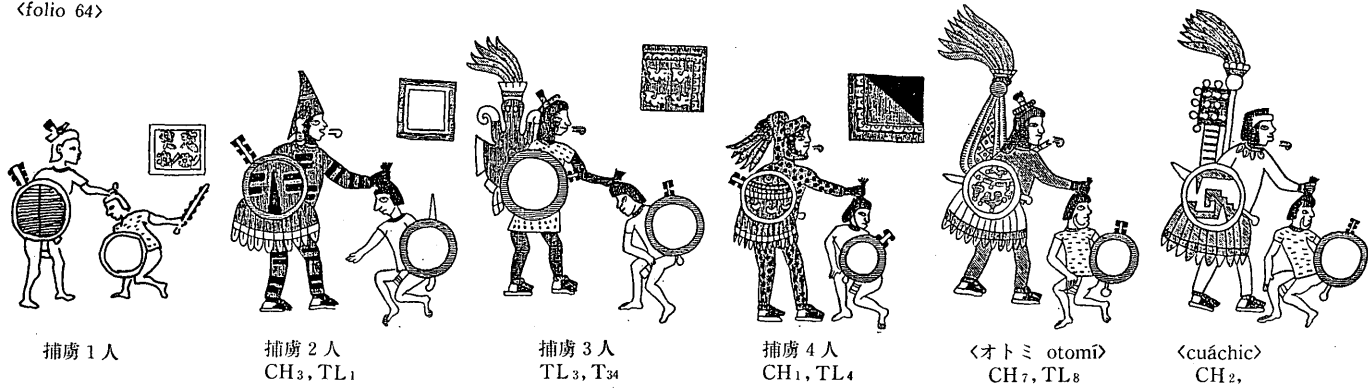
ケツアル鳥羽毛 (quetzalli), ひすい (chalchihuitl) は、トルコ石, 腕輪とともに、王権を指示するメタファとして、huehuetlatolli とよばれる古からの講話演説のなかで言及されている [CF VI: 47, 57; HG 1975: 322; GARCÍA QUINTANA 1980]。また、モクテスマⅡ世の政治改革声明にも同様の趣旨の次のような文言が登場している。

「高級な宝石も低級で粗末な石に混れば、劣悪に見えるように、王室の血統をもつ人も下層民のなかではみすばらしくなる。…中略…大領主たちの羽毛も、平民やその子弟たちが着用すればみばえない。そして手の込んだ高級なマントや下帯が、下層民のエネケンのマントと異なるように、領主とそうでない者の間には差がある」 [DURÁN 1967, II: 404]。

(2) 戦士の階梯と「制服」

メンドサ絵文書第Ⅲ部 (以下 CM Ⅲ, 図11) folio 64, 65 はアステカの戦士に与

<folio 64>



<folio 65>

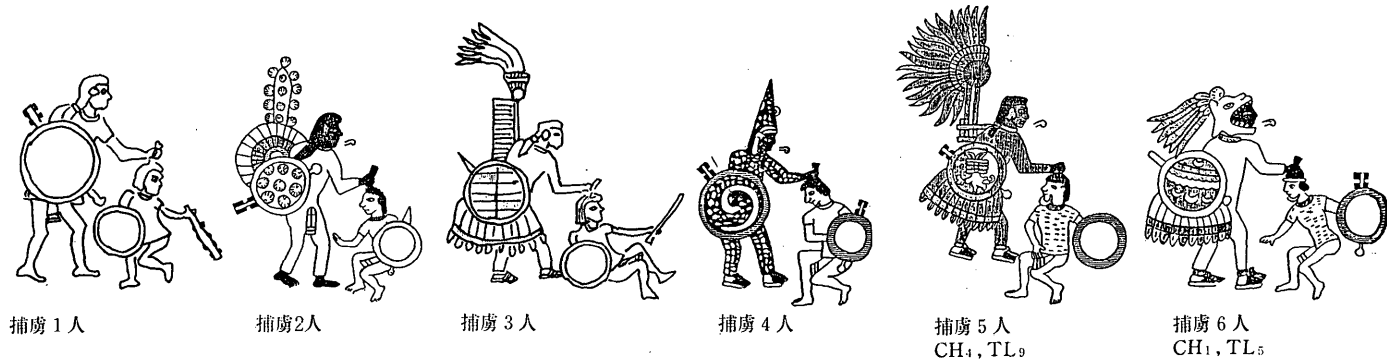


図11 メンドサ絵文書 folio 64, 65 記載の戦士服

えられた楯，戦士服，マント，頭飾りなどが描かれている。戦士は戦場で捕虜を一人つかまえる毎に階梯を上昇していく。この戦士階級の組織の実態は Monjarás-Ruiz [1976] や Pihó [1976] の研究があるとはいえ，サアグンの記録 [CF VIII: 75-77, 87-89] と CM III の記載が一致しないなど不明な点も多い。

若者 (telpochtli) が並の兵士 (yaoquizqui) から戦士 (tiacauh) の階梯に昇るには，捕虜をつかまえることが必須条件であった。捕虜をつかまえるとメシカ大領主から，マント，下帯を下賜されるとともに，束ねていた長髪を切ることができた。捕虜3人をつかまえると若者頭 (teáchcauh) となり，4人つかまえると tequihua の身分になる。tequihua は字義どおりには「職務をもつ人」という意味であり，アステカ社会の支配・官僚機構の登竜門に位置する身分であった。頭頂部に temillotl という髪飾りを結びつけて，「鷲の家」(cuauhcalli) という戦士の館に出入りできた。tequihua より上級では，戦士に特化していく道と，行政官僚機構の階梯を登っていく道とに分岐している²⁶⁾。前者は，otomí, cuáchic あるいは「ジャガー戦士団」，「ワシ戦士団」

表6 戦士階級の「制服」

位階	衣類		楯		戦士服	
	a	c	a	b	a	b
捕虜 1 人	花柄マント	黄色マント サソリマント 赤下帯 多色下帯	竹製	木製	胴着	胴着
2 人	黄色マント (T ₂₀)		CH ₃	ihuiteteyo	TL ₁	TL ₁₁
3 人	巻貝マント (T ₃₄)		木製	多色	TL ₃	旗飾り
4 人	2分マント		CH ₁	渦巻	TL ₄	TL ₁
5 人		赤色格子マント 2分マント	CH ₇	CH ₄	TL ₈	TL ₉
6 人			CH ₂	CH ₁	旗飾り	TL ₅
ticocyahuácatl	杯型縞縁		CH ₂		旗飾り	
huitznáhuatl	黄色縞縁		CH ₁		旗飾り	
tlacochealcatl	T ₃₄		ihuiteyo		TL ₆	
tlacatécatl	赤色眼玉縁		CH ₅		TL ₇	

a: CM III 64, b: CM III 65, c: CF VII
Tn, CHn, TLn は，それぞれ図 3, 5, 6 に対応。

26) ただし，後者の場合，戦士としての肩書を喪失する訳ではなく，戦場には華麗な「制服」で参加した [Rounds 1977]。

とよばれる戦士団として編成されていた²⁷⁾。

これらの戦士階級ではその位階・武勲に応じて、メシカ大領主から、諸種の「制服」を下賜され、特権を与えられる。表6は、CM III とサアグンの記録によって、戦士に与えられる「制服」などを整理したものである。CM III の場合、2つの系列があり、一方の系列には、temillotl という鬘、他の系列では、耳と頬が赤く塗られるという示差性があるが、これが何を意味するかは不明である。また CM III の注記は、他の年代記と矛盾する点も多い。また、捕虜の評価が、隣接する敵国トラスカラ、ウエショチンコ、アトリスコという「花戦争²⁸⁾」(xochiyaoyotl) の舞台で捕えたものとワステカ地方で捕えたものでは大いに異なった²⁹⁾。捕虜のランク差は CM III で衣裳の差からわかる。表6にかかげた「制服」類の大半は「貢納表」に記載されている。

(3) 役職者の「制服」

tequihua になったもののなかから、メシカ大領主の統治機構のなかで役職をもつものがえらばれる。行政執行官(achcacauhtin)は平民出身者で占められるが、「判事」(tecutlatoque)は大部分が貴族出身者で占められた[CARRASCO 1961]。そして、もっとも上位の役職者は、最高審議会(tlatocan)を構成するメシカ大領主の一族に属する貴族が独占していた。CM III の folio 65~67 (図12)には、これらの役職者の「制服」がえがかれている。

行政執行官は大部分が、木綿製胴着といういでたちである。アステカの官僚体制の中級または上級の役職者は、「制服」あるいは戦士服の姿で描かれている。軍事部門の統轄責任者 tlatatécacatl は平民出身、tlacocheacatl は貴族出身のものが任官されたらしいが[PIHO 1972]、前者は quaxolotl という戦士服と teocuitlaxapochimalli という楯、後者は tzitzimitl という戦士服、quetzalpamitl という旗飾りと ihuteteyochimalli という楯をもっている。かれらよりやや劣る地位にあった huitznáhuatl, ticociahuácatl は、頭飾りをもたず旗飾り(pamitl)と楯をもっている。

この戦争時の衣裳を着た4役職は、他の6役職とともに、非戦争時の「制服」姿でも描かれている。tlatatécacatl, tlacocheacatl, tezcacoacatl, ticociahuácatl, tocuilt-

27) CM III folio 64 には、otomí (図9-5) と cuáchic (図9-6) が描かれているが、otomí の特徴的な耳を出した短髪刈り上げスタイル [DURÁN 1967, II: 284, 310] は、CM III では cuáchic にあらわれている。

28) 「花戦争」は征服のための戦争でなく、戦士の訓練、捕虜の確保のためのものであった [VINCOURT 1966: 101-124; HICKS 1979]。

29) tequihua 以上に昇進するには、ワステカやミステカの捕虜を10人以上捕えてもだめであり、必ず「花戦争」の舞台で捕えなければならなかった [CF VIII: 77]。



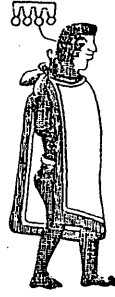
quauhnochtli



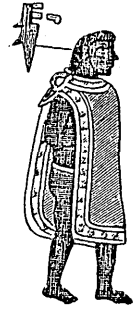
tliancalqui



atempañecatli

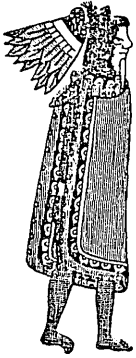


ezguaguacatl



huitznáhuatl

T₂₀



tlacatēccatl



tlacocheácatli



tezcacōacatl

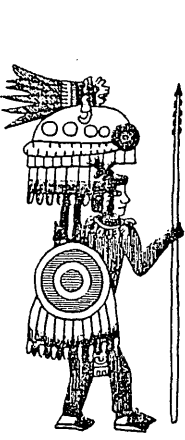


ticocyahuācatli

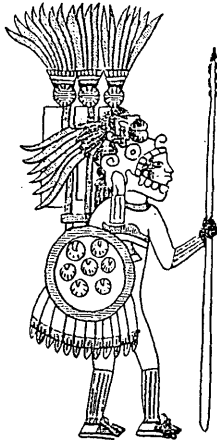


toquiltecatli

T₃₄



tlacatēccatl
TL₇



tlacocheácatli
TL₆



huitznáhuatl
CH₁



ticocyahuācatli
CH₂

図12 メシカ役職者の「制服」と戦士服

ecatl の 5 役職は、ケツアル羽毛髪バンド (quetzallalpiloni)、唇飾りをつけていることから、他の 5 役職より上の地位にあったといえよう。このことは、着用しているマントの縁や柄からも知ることができる。下位の 5 役職のマントは縁取りはあるものの柄やモチーフもなく、単色の地でしかない。

(4) 「貢納表」、CMⅢ、サアグンの記録の比較

サアグンの記録の第 8 巻には、領主・貴族の衣類、踊りの場合の装身具類、戦争時の衣裳、女性の衣裳が詳述されている。これを、「貢納表」の衣類・武具類・装身具類、あるいは CMⅢ の戦士・役職者の衣裳と比較することにより、「貢納表」に記載された威信財の分配先を同定することができる。サアグンの記録としては、マドリッド歴史アカデミー絵文書 (*Códice Matritense de la Academia de la Historia* 以下 CMA) とフローレンス絵文書 (*Códice Florentino*, 以下 CF) および『新スペイン事物総誌』(以下 HG) が残っているが、相互に若干の相異がある。

領主・貴族の衣服としては、マントが CMA では 57 種 (folio 6) と 38 種 (folio 55)、CF では 54 種、HG では 11 種が記載されている。これらの重複を除けば、マントは 83 種となる。一方、下帯としては CMA が 13 種 (folio 5) と 9 種 (folio 55)、CF が 13 種をあげている。重複を除くと 22 種となる。サアグンの記載している領主・貴族用マントのなかには、「貢納表」のなかで、眼玉模様あるいは羽毛の縁をもち、特定のシンボルを柄にしたマントは、すべて含まれている。同様のことは、CMⅢ の上級役職者 5 名のマントについてもいえる。

踊りの時に領主が着用する衣裳として、CMA は 38 種 (folio 7) と 14 種 (folio 56)、CF は 37 種が記載されているが、重複を除くと 41 種となる。このうち、ケツアル羽毛製髪バンド、唇飾り、緑色ひすい製首飾りは「貢納表」に記載された装身具であり、前 2 者は CMⅢ にも記載されている。

戦争時の衣裳としては、CMA は図像とテキストで若干異なったものを記載している。図像 (folio 72-80) では 6 名の戦士像と、61 種の衣裳 (楯 12 種、戦士服 47 種、装身具 2 種) が描かれている。テキスト (folio 68-69) では領主・貴族層と戦士 (tiyacacaua) 層とが区別され、前者では 40 種 (楯 7 種、戦士服 24 種、装身具 8 種、武器 1 種)、後者では 50 種 (楯 6 種、戦士服 32 種、装身具 6 種、武器 6 種) の衣裳が記載されている³⁰⁾。そして、それぞれ 3 名の戦士の衣裳の記述が加えられている。CF では 32 種 (楯 3 種、戦士服 26 種、装身具 3 種) が記載されている。これらを整理すると、

30) 領主・貴族層と戦士層の衣裳の差は、楯の場合、羽毛製の垂飾りや金板モザイクの有無、戦士服の場合、ケツアル羽毛の有無、装身具の場合、金、ひすいの有無などにあらわれている。

楯21種、戦士服80種、装身具15種、武器6種となる。

CM III で戦士の携えている楯11種のうち6種、「貢納表」の楯のうち3種が、サアグンの記録に記載されている。戦士服では、「貢納表」で分類した12種の戦士服は、すべてサアグンの記録に含まれている。サアグンの記録では、各タイプの戦士服に色彩による数種の変異が記載されているが、「貢納表」における色彩の変異と必ずしも一致はしていない³¹⁾。また、「貢納表」に記載がなく、サアグンの記録、CM III には記載されている諸種の旗飾り (pamitl) や背負い飾り類などは、メシカ大領主お抱えの羽毛細工師によって製造されたと推定できる。

表7は、「貢納表」に記載された柄物マント、楯、戦士服のうち、着用者の社会的地位身分の判明しえたものを示している。これらの威信財は、アステカ社会の外部とも交換されている。それは独立・敵対領主国の領主たちへの贈物としてである。遠隔地である地峡部の領主たちには、ポチテカを媒介として、2種のマントが贈られた [CF IX: 8, 17]。トラスカラ、ウエショチンコ、メスティトラン、メチャアカン

表7 貢納表記載「衣裳」の分配される社会階層

衣類		楯	
Q1	若者 (telpochtli), 歌舞師, 大工, 石工, 絵師, 羽毛細工師, 金属細工師, 宝石細工師	CH ₁	戦士IV, VI, huitznáhuatl
M1	戦士I	CH ₂	cuáchic, ticocyahuácatl
M2	戦士I, ポチテカ首長	CH ₃	戦士II
H ₃	「王の衣裳」	CH ₄	戦士V
T ₁₅	大領主	CH ₅	tlacatéccatl
T ₁₇	戦士V	CH ₇	otomí
T ₂₀	戦士II, 大領主	戦士服	
T ₂₂	戦士IV	TL ₁	戦士II
T ₂₅	「王の衣裳」, ポチテカ首長	TL ₃	戦士III, タラスカ領主
T ₂₈	大領主	TL ₄	戦士IV, ヨピチンコ領主
T ₃₃	「王の衣裳」	TL ₅	戦士VI
T ₃₄	戦士III, tlacochcalcatl, 大領主	TL ₆	tlacochcalcatl, メスティトラン領主
		TL ₇	tlacatéccatl, トラスカラ領主
		TL ₈	otomí
		TL ₉	戦士V
		TL ₁₁	戦士II, ウエショチンコ領主

Q_n, M_n, H_n, T_n, CH_n, TL_n は、図3, 5, 6に対応
 戦士I~VIはCM IIIの位階に対応

31) たとえば、コヨーテ型戦士服の場合、サアグンの記録では、黄、青、紫、白(以上領主・貴族層)、暗赤色、黒、炎色(以上戦士層)の7色があるが、「貢納表」では黄色のコヨーテしかない。

(タラスカ)、ヨピチンコなど敵対領主³²⁾に対しては、かれらを招待した祭式(即位式、建築落成式など)において、柄物マント、楯、戦士服が贈与された [Tezozómac 1975: 595, 621, 628-629]。

2. 威信財再分配の場としての祭式

メシカ大領主のもとに集荷された威信財としての衣類、武具類、装身具類は、どのような社会的場において再分配され、その場に参加したのはいかなる社会集団であったのだろうか。その一端は、前節までに若干紹介もしてきた。年代記などにおいては、歴代諸王の葬儀、即位式、神殿着工落成式などにおいて大量の威信財が、招待者、参加者に分配されていたことが語られている。そして、これらの行事に欠くことができないのが、人身犠牲となる戦争捕虜である。メシカにとって戦争とは、神々への贈物である捕虜を確保する手段であるとともに、支配者層に再分配される諸種の威信財、生存財とを確保するという「生産活動」であり、最も重要な職務であった。戦争時の功績に対するメシカ大領主からの威信財再分配については、前節(2)で紹介した。

本節では、年代記では明示的に言及されないメシカの祭式という社会的場における威信財再分配を中心に分析をおこなう。

(1) 祭式と貢納

アステカ社会では、20日をひと月とする18ヶ月の各月に、様々な祭式が举行された。各月の祭式については、サアグンの記録 [CF II] に詳細な記述がある。これを手際よく構造分析した Carrasco [1979a] や Broda [1976] の研究によると、年祭のうち6つのものが貢納期と対応している。

この6つの貢納期は、サアグンの記録からではなく、他の史料から推定されたものである。そのひとつがチマルポポカ絵文書である。これは三都市同盟のひとつテスココの貢納期を記しており、それによると6つの年祭の時期に柄物マント、下帯、女性用衣類が貢納されたという [Códice Chimalpopoca 1975: 64]。しかしメシカ大領主モクテスマⅡ世への貢納に関する1554年の調書では、5つの年祭が貢納期となっている [Scholes and Adams 1957: 14-15, 30-32]。この2つの史料の重複分を除けば7つの年祭が貢納期と対応したと解釈することもできる。先スペイン期のメキシコ中央高原においては「80日毎」に貢納するのが一般的であったが、これはあくまで貢納する側からの評価であり、数多くの貢納プエブロを支配下においていたメシカ大領

32) 独立・敵対領主国については、Davies [1968] の研究が詳しい。

表8 年祭における貢納と威信財再分配

順	年 祭 名	西暦との 対 応	農 耕 暦	貢 納	衣裳分配	宴 会	王の関与
II	Tlacaxipehualiztli (人間の皮はぎ)	3月6日～ 25日		有	有	敵国 領主も	
VI	Etzalcualiztli (トウモロコシ・豆食)	5月25日～ 6月13日	雨季開始 播種	有 (捕虜)	?	?	水神儀礼
VII	Tecuilhuitontli (領主の小祭)	6月14日～ 7月3日		有	有	領主 ～平民	分領主・平民配 踊りに参加
VIII	Huey Tecuilhuitl (領主の大祭)	7月4日～ 23日	トウモロコシ 欠乏期	有	有	領主 ～平民	同上
XI	Ochpaniztli (掃き清め)	9月2日～ 21日	雨季終了 トウモロコシ 収穫開始	有	有	?	同上
XV	Quecholli (フラミンゴ)	11月1日～ 20日		有	有	有	儀礼的狩猟 貴族招宴
XV	Panquetzaliztli (旗の掲揚)	11月21日～ 12月10日		有	有	敵国 領主も	分ウィチロポテト リ供儀

主側の立場に立つならいづれの年祭にも貢納品が納入されていたと考えることもできよう。

表8は、貢納期と対応する年祭において、王権、貴族・戦士階層がいかなる関与をしていたかを、威信財の再分配という側面を中心にして整理したものである³³⁾。貴族・戦士階層に「制服」たる「衣裳」が分配されるのは6つの年祭であり、そのうち、Tlacaxipehualiztli, Huey Tecuilhuitl, Panquetzaliztli の3つの年祭では、敵国の領主まで招待され、衣裳などを贈与されていた [DURÁN 1967, II: 416]。

アステカにおける祭式は年祭だけでない。王の葬儀と即位、神殿落成などでも大規模な祭式が挙行されている。これらの祭式においても、メシカ大領主は服属プエブロから大量の貢納品を徴発していた。1487年の大神殿落成式には、30を超える民族集団が金、宝石、装身具、羽毛飾り、マント類などの威信財を携えて参加した³⁴⁾。この貢納品は祭式を執行する神官と、領主・貴族層の着用する「衣裳」を作製する工芸人たちに配分されている [DURÁN 1967, II: 341]。この神殿落成式には、敵国の領主たちも招待され、装飾にみちた楯、戦士服、マント、下帯や金製の王冠、耳飾り、鼻

33) 各月の西暦との対応については、諸説あるが、本稿では Carrasco [1979a] に従っておくことにした。

34) この神殿落成式に参加した民族集団の分布については、拙稿 [小林 1975: 150-163] を参照されたい。

飾り、唇飾り、腕輪、足飾り、ジャガーとピューマ皮製のはき物と、家臣たちへの分配用として一荷のマントが贈られた [DURÁN 1967, II: 345]。また神殿工事や落成式に関与した職人たちに各職分に応じてマントと下帯が分配されている。それは、「市 (ciudad) の手足となり³⁵⁾」、大領主を支えてくれた職人たちのサービスに対する報賞であった [DURÁN 1967, II: 347]。同様の事例は、モクテスマⅡ世時のコアトラン神殿の落成式でもみられる [TEZOZÓMOC 1975: 627-631]。

祭式などで再分配される貢納品は、メシカの守護神ウィチロポチトリの収穫物である。この認識は、メシカの支配階層に共有されていたようである。メシカ大領主の補佐役シワコアトルが、近隣の同盟領主、メシカの領主・貴族、戦士階層に「衣裳」を分配する際におこなった演説にそのことは示されている [TEZOZÓMOC 1975: 473]。

(2) 祭式における社会関係の表出

メシカ大領主が関与する年祭に対し、貴族、戦士層と平民とが参加する態度は同一ではない。その一例として、Huey Tecuilhuitl (7月4日-23日)の月に举行された「領主の大祭」の様子を分析してみよう。

この年祭が举行される7月は、トウモロコシの欠乏期であり、平民たちにとっては、トウモロコシの神 Xilonen への儀式執行が最大の関心事であった³⁶⁾。これに対し、メシカ大領主は、平民に対する食事の配給・招宴を「領主の大祭」に先立つ7日間におこなう [CF II: 91]。この招宴には、メキシコ盆地全域の貧民や農民が参集し、ひとりの平民あたり1日20個のタマーレ (tamale) と1杯のアトーレ (atole)³⁷⁾ が分配されたという [GÓMEZ DE OROZCO 1945: 45]。一方、「領主の大祭」の期間中の戦士階層に対するカカオ、ピノーリ (pinolli)³⁸⁾、プルケ酒などの特権的食品の提供は、メシコの各街区 (barrio) やチャルコ、ショチミルコ、テパネカ地区に課せられている。それは、「戦争の遂行と敵からの祖国防衛」という職務での戦士階層の功績に対する平民からの報酬と謝意の表現であった [DURÁN 1967, II: 129, 267]。

35) 「市 (ciudad) の手足となり」という表現は、領主 (支配者) の「市の心臓」(yollo in atl in tepetl) という表現に対比されるべきものであろう [CF VI: 47; GARIBAY 1943; BAUDOT 1978; LÓPEZ AUSTIN 1980, II: 447-455]。

36) 毎年7月におこなう祭式だけでなく、8年に一度 Atlamalcaliztli とよばれるトウモロコシの活力再生の祭式も、Huey Tecuilhuitl の月に举行された [DURÁN 1967, I: 66, 67, 265, 266; CF II: 163-164]。

37) タマーレは、トウモロコシ粉を練り蒸したモチ状の食物、アトーレは、トウモロコシ粉を湯にといた飲み物である。

38) 「心臓、血」(yolloti eztli) というメタファで指示されるカカオは、領主、貴族、有力戦士のみが飲用を許されていた [HG 1975: 423; DURAND-FOREST 1967]。ピノーレは、トウモロコシ粉を炒ったものもさすが、ここではチア (chia, *Salvia sp.*) の粉を意味する。

これは一見すると政治・経済的互酬性の表出のようであるが、祭式において強調されるのは支配-従属関係にもとづいた序列関係にはかならない。「領主の大祭」では、様々な位階に属する戦士たちだけでなく、貴族や領主も歌舞に興じたという。しかし、歌舞に対する関与の仕方も、その「衣裳」と同様に差異、序列性をもっていた。メシカ大領主は、自己の意志で踊りに参加・不参加を決めることができたが、戦士たちは手を取りあって踊りの隊列からはみでることはできなかった。貴族は戦士のような踊りの隊列を組むことなく、自由な場所で踊れたという [CF II: 93]。

祭式場で、メシカ大領主が「衣裳」を貴族、戦士層に分配する様子は、Huey Tecuilhuil の年祭の場合不明だが、Ochpaniztli (9月2日-21日) の記述 [CF II: 114-117] から推測できる。戦士たちは、位階に従って整列した型でモクテスマⅡ世の前に並び、立ったままで挨拶をおこなう。鷲の羽毛敷とジャガー皮の背もたれで出来た王座の前に置かれていた「衣裳」を、戦士たちは立ったまま贈物 (netlauhtilli) として受けとる³⁹⁾。職務に対する報酬 (patiuhtli) である「衣裳」をまとった戦士達は「手振踊り」 (nematlaxo) をおこなう。一方、貴族たちは翌朝、金やケツアル羽毛で飾られた「衣裳」を太陽光に輝かせながら、モクテスマとともに「手振踊り」をおこなっていた。

以上の例から、大領主と領主・貴族そして戦士層との社会的関係は、「衣裳」の序列だけでなく、祭式での立ち振舞まで規定していたことがわかる。威信財である「衣裳」の再分配の場である祭式は、アステカの社会的階層構造がより明示的に顕現する場であり、その構造を強化確認するイデオロギー装置でもあった [BERDAN 1978b; BRODA 1978b]。

3. 平民への再分配と王権

前節までの記述から、アステカ社会においてメシカ大領主は、貢納、遠隔地交易などにより威信財を集荷し、それを再分配する役割をもっていたことは十分判明したであろう。王権は単に経済的な意味での財の分配にとどまらず、祭式という場で、政治的な支配・従属関係を確認させるという演出者の役割をもはたしていた。そのためには、王権は、支配される人々を統制するだけでなく、かれらに気前よさを発揮せねばならなかった。

(1) 歌舞・娯楽における再分配

サアグンの記録は、領主に課せられた職務 (tequiotl) のひとつに、歌舞と娯楽をあ

39) 戦士でも下級のものには「ワステカ様式」の「衣裳」が与えられている。

げている [CF VIII: 51-59]。歌舞に対する王権の関与は前節でも若干ながら紹介した。領主が踊り (macehualiztli)⁴⁰⁾ という歓びの行事 (papaquiliztli) に関心を払った理由としては、領主、貴族、戦士および平民を慰安し励すためとしかサアグンの記録はのべていない。歌舞のためには楽器の演奏者や歌手 (cuicanime) を召集するだけでなく、それに参加する人々がまとう「衣裳」や食事を調達し、位階に応じて配分するという職務がある。この職務の具体的な分担は、官僚に委ねられたが、主催者としての王権に期待されるものは多かったであろう。

王権が関与する娯楽としては、ペロータ球技 (ullamaloni)⁴¹⁾ とパトリー (patolli) があげられている。ペロータ球技では、領主同士が自らの財を提供して、一種の賭けをおこなっていた。賭けられたのは、高級なマント、アヒル羽毛マント、高級な下帯、緑ひすい製唇飾り、金製耳飾り、緑ひすい製首飾り、金製首飾り、緑ひすい製腕輪などの威信財であった⁴²⁾。平民は、古いマントを勝者とみなした側に置き、もしその側の球技者が勝つと相手側の領主が賭けた財の配分を受けることができたという [CF VIII: 59]。同様の賭けは、パトリーでもおこなわれた。王権は、これらの娯楽に関与することで自らの気前よさを誇示していたとも解釈できよう。

領主は、平民が貧困に苦しむ時、収税官に命じて、マント・下帯、住居、トウモロコシ・インゲン豆・アマランスといった基本的な生活物資を提供する度量をもつことが期待されていた。貧民がすばらしい頌歌を領主に献上したなら家財一式と使用人まで下賜されたという [CF VIII: 60]。本来なら木綿製のマントの着用を禁じられているはずの平民は、いかなる職務を担った場合、木綿製マントなどの威信財の配分を受けることができたのであろうか。

(2) 公共記念事業への動員と財の分配

メシカの歴代大領主が、大神殿の増改築や水利事業を精力的に展開していたことは、年代記にかなり詳しく記述されている。大神殿とそれを取り巻く幾多の石造物は、諸々の祭式が演じられる場でありその舞台装置であり、石彫物はアステカ社会のコスモ

40) ナワトル語で踊りに対応することばは、netotiliztli と macehualiztli の2語がある [MOLINA 1970: 35]。netotiliztli は、「喜びの踊り」(baile de regocijo) という意味である。macehualiztli は、「功績、功德」(merecimiento) という意味で、昼夜を徹して神々のために踊る苦行を指していた。平民を指す macchualli は、この語と同一の語源である [MOTOLINÍA 1971: 386-387]。

41) ペロータ球技については、Durán [1967, I: 205-210] に詳しい記述がある。その文化的意味については Garza [1980] の研究を参照されたい。ペロータ球技場は多くの都市遺跡で発見されている。

42) サアグンの記録 [CF VIII: 29] によると、奴隸、耕地、家屋、カカオ、トルコ石などを賭けた領主相互の試合もあった。

ロジーを具体化していた [TOWNSEND 1979]。これら石彫物は、歴代大領主の意向をうけてつくられ、石工 (tetlapanqui, tetzotzonqui) たちは、支配者のための芸術 (arte oficial) を造り出していた [AGUILERA 1977]。

モクテスマⅡ世時代の1512年頃、大神殿に置く“temalácatl”という円盤状の石造物⁴³⁾をつくるため、チャルコ地方から石が切り出されようとしたことがある。切り出し、運般には10,000~12,000の夫が動員され、30人の石工がその製作に当たった。湖岸に完成品が到着すると、メシコから足棒軽業師 (cuauhtlatlazque)⁴⁴⁾、大鼓 (teponaztli) や笛・鼓をもった楽隊・神官がやって来て儀式と祝宴が開かれた。ここでは石工に対して、3度の食事、上等なマント、下帯、サンダルなどがメシコ大領主の役人から与えられている [TEZOZÓMOC 1975: 662-663]。この直後、モクテスマはチャプルテペクの丘に肖像を彫ることを石工たちに命じ、各石工に4 braza のマント、女性用衣類のほか、食塩、ペピータと豆をそれぞれ10荷、トウガラシ2袋、トウモロコシをカヌー1杯、カカオ2荷、木綿2荷の食料を与えている。完成した肖像に満足したモクテスマは、さらに報賞を石工たちに与えた。石工たちに与えられたものは、ワステカ地方⁴⁵⁾から納入された貢納品の一部が充当された。また2人の家内奴隷が、各石工に割り当てられている [TEZOZÓMOC 1975: 666-669]。

この2つの事例では、上等なマント、サンダル、カカオ、木綿および家内奴隷といった平民には接近不能の財が、モクテスマから石工たちに下賜されている。これらの財が分配されたのは、メシコ大領主の委託した職務を遂行したものたちであろう。その職種としては、絵師 (tlacuilo)、漆くい師 (tlaquilqui)、大工 (tlaxinqui)、陶工師 (coquichiuhqui)、敷物造り、調香師、猟師、漁師などがあげられている [DURÁN 1967, II: 347]。これらの技芸をもった平民が、広義の「トルテカ人」(toltecatl)に該当していたと思われる。これに対し、石工たちに食料を提供したり、綱で石を引いたりした平民には、特定の威信財がメシコ大領主から下賜されることはなかったようである。もし、かれらに食事が提供されたとしても、メシコ大領主からではなく、在地領主たちからであったと思われる⁴⁶⁾。

43) temalácatl は、tlacaxipehualiztli の月(3月6日-25日)の祭式でおこなわれた「剣闘士の犠牲」で、捕虜が結びつけられていた円盤である。

44) 領主お抱えの芸能集団としては、このほかに、こびと (tzapame)、ちんば (villame)、せむし (tepotzome) などがいた [CF VIII: 30]。

45) Cuetlaxtlan 区と Tochpan 区が言及されているが、両貢納区とも、多様な柄物マントを貢納している。

46) 公共事業における労働力徴発については Rojas Rabiela [1979] を参照されたい。

おわりに——王権と職務——

貢納によってメシカ大領主のもとに集荷された威信財としての「衣裳」は、メシカ大領主が課した「職務」への報賞と「職務」そのものの銜示という役割をになって、諸々の社会集団に再分配されていた。ナワトル語では、貢納を意味する *tequitl* は、人々に指定された仕事、任務、責務を意味することばでもある。この *tequitl* の抽象概念が、これまで「職務」といつてきた *tequiotl* に相当する。アステカ社会における威信財の移動は、この「職務」の序列化した体系に従っていたといえよう。

大量の「衣裳」を集荷、再分配するだけでなく、同一の衣裳を2度と着用しないという華美な「衣裳」の大量消費者であったメシカ大領主は、いかなる「職務」によって、そのような威信財の独占者となりえたのであろうか。この問題への手掛りは、王の葬儀、即位式の際に長老たちによって詠唱された *huehuetlatolli* のなかに見い出すことができる。この *huehuetlatolli* は、サアグンの記録 [CF VI: cap. 10-16] のほかに、いくつかの草稿も残っており [GARIBAY 1943]、年代記のなかでも引用されている⁴⁷⁾ [TEZOZÓMOC 1975: 456-458, 571-572]。

王を指すナワトル語 *tlatoani* は、「話す人」すなわち「命令する者」という意味である。かれは「太陽と大地を動かす」という宇宙論的「職務」を遂行するため、人間世界においてもいくつもの「職務」を与えられている。サアグンの記録では、戦争 (*yaoyotl*)、歌舞 (*macehualiztli*)、町の警護、市場管理、娯楽などがその「職務」としてあげられている [CF VIII: cap. 17]。また、王たちによる最高審議会 (*tlatoacan*) では、戦争と *tequitl* の決定がおこなわれていた [CF VIII: cap. 14]。大領主に与えられた「職務」は、支配下にある諸々の人間集団をメシカの支配体制の特定の場に配置すること (*tlatecpanliztli*) であったと解釈することも可能であろう。

huehuetlatolli における王と平民に関するメタファは、この関係を示唆するものにほかならない。王は、「市の心臓」であり、人々を敵から守る「防壁」(*tenamitl tzacuilli*) だけでなく、人々を庇護し安穩にさせる大木 (*ahuehuetl pochotl*)⁴⁸⁾ にたとえられている。王の背、肩、腕に寄りかかっているのが平民である。平民 (*macehualli*) は、王によって担れる荷物 (*tlatquitl, tlamamalli*) であり、王国を鳥にたとえるなら、

47) *huehuetlatolli* の分析から、アステカの社会関係にアプローチする試みは、Sullivan [1974, 1980] や Broda [1978b] によっておこなわれつつある。

48) *ahuehuetl* はマツ科に属す 20-30 m の喬木であり学名は *Taxodium mucronatum* である。*pochotl* はセイバ (*Ceiba pentandra*) のナワトル語名で 40 m ぐらいに成長する。前者は高地で、後者は湾岸低地で、それぞれ生命樹、宇宙樹とみなされていた。これらの木のつくる影 (*cueallo*) が、平民を庇護する王の度量にたとえられた [CF X: 109]。

「尾であり翼」(cuitlapilli atlapalli)であった。この両者の間には、王の「職務」を委託された貴族、戦士で構成される官僚たち (tecutlatoque) が位置しており、かれらは「市の舌、あご、眼、耳」とたとえられた [CF VI: 73-79]。

王国を構成する人間を各部位に配置し、その心臓から送り出す血液で、部位を動かす、王国を治めていった王の「職務」は、「奴隷のごとき労働」(tlacotili tequitili) であると huchuetlatolli では形容されている [GARIBAY 1943: 82; CF VI: 56]。この「職務」に対して、華麗な「衣裳」の独占が許されたと解釈できないであろうか。

本稿では解明できなかった問題も多い。とりわけ、アステカの祭式の担い手である神官層の位置づけと、祭式において神々(偶像あるいは神官)がまとう「衣裳」については、ほとんど言及できなかった。貢納された「衣裳」と神々の「衣裳」の対比をおこなえる史料が少ないことと、「神々」への「衣裳」の提供が再分配の論理で説明できそうになかったからである。また、貢納、遠隔地交易、地域市場相互間での財の移動や、貢納量に対する分配量の確定などは、仮説を積み重ねた空論になる危険性が多いため論じなかった。そして、祭式分析では不可欠な「衣裳」のシンボル論的分析も課題としては残っているが、これらは将来取り扱うことにしたい。

付 記

本稿の素案は、共同研究「職業の成立とその分化についての比較研究」(代表者 野村雅一助教授)で2度にわたって発表したものである。また本稿作成にあたっては、科学研究費(奨励研究, 課題番号59780246)を利用した。

文 献

- ACOSTA SAIGNES, Miguel
1945 Los pochtecas. *Acta Antropológica* 1(1).
- AGOGINO, George
1977 The Mysterious Chalchihuitl, Green Stone of Ancient Mexico. *Anthropological Journal of Canada* 15(3): 22-25.
- AGUILERA, Carmen
1977 *El arte oficial tenochca: Su significación social*. UNAM.
- ANAWALT, Patricia Rieff
1977 What Prize Aztec Pageantry? *Archaeology* 30: 226-233.
1980 Costume and Control: Aztec Sumptuary Laws. *Archaeology* 33: 33-43.
- BANDELIER, Adolph F.
1878 On the Distribution and Tenure of Land and the Custom with Respect to Inheritance among the Ancient Mexicans. *11th Annual Report of the Trustees of the Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology* 2: 385-448.

- 1879 On the Social Organization and Mode of Government of the Ancient Mexicans. *12th Annual Report of the Trustees of the Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology* 2: 557-699.
- BARTRA, Roger
1975 Tributo y tenencia de la tierra en la sociedad azteca. *Marxismo y sociedades antiguas: El modo de producción asiático y el México prehispánico*. Grijalbo, pp. 125-154.
- BAUDOT, George
1978 Un huehuetlatolli desconocido en la Biblioteca Nacional de México. *Estudios de Cultura Náhuatl* 13: 69-87.
- BEAUCAGE, Pierre
1976 Ethnohistoria y marxismo: una región periférica del imperio azteca. *Nueva Antropología* 4: 43-82.
- BERDAN, Frances Frei
1976a A Comparative Analysis of Aztec Tribute Documents. *Actas de XLI Congreso Internacional de Americanistas (México 1974)* 2: 131-142.
1976b La organización del tributo en el imperio azteca. *Estudios de Cultura Náhuatl* 12: 185-195.
1977 Distributive Mechanisms in the Aztec Economy. In Rhoda Halperin and James Dow (eds.), *Peasant Livelihood: Studies in Economic Anthropology and Cultural Ecology*, St. Martin's Press, pp. 91-101.
1978a Tres formas de intercambio en la economía azteca. In P. Carrasco and J. Broda (eds.), *Economía política e Ideología en el México prehispánico*, Nueva Imagen, pp. 77-95.
1978b Replicación de principios de intercambio en la sociedad mexicana: de la economía a la religión. In P. Carrasco and J. Broda (eds.), *Economía política e Ideología en el México prehispánico*, Nueva Imagen, pp. 175-193.
1978c Ports of Trade in Mesoamerica: A Reappraisal. In David Browman (ed.), *Cultural Continuity in Mesoamerica*, Mouton, pp. 179-198.
- ボガトウイリョフ
1981 『衣裳のフォークロア』 中沢新一訳 せりか書房。
- BORAH, Woodrow and Sherburne F. Cook
1963 *The Aboriginal Population of Central Mexico on the Eve of the Spanish Conquest*, Ibero-Americana 45. University of California Press.
- BRODA, Johanna
1976 Los estamentos en el ceremonial mexicana. In P. Carrasco and J. Broda (eds.), *Estratificación social en la Mesoamérica prehispánica*, CIS-INAH, pp. 37-66.
1978a El tributo en trajes guerreros y la estructura del sistema tributario mexicana. In P. Carrasco and J. Broda (eds.), *Economía política e ideología en el México prehispánico*, Nueva Imagen, pp. 115-174.
1978b Relaciones políticas ritualizadas: El ritual como expresión de una ideología. In P. Carrasco and J. Broda (eds.), *Economía política e ideología en el México prehispánico*, Nueva Imagen, pp. 221-255.
1978c Consideraciones sobre historiografía e ideología mexicas: Las crónicas indígenas y el estudio de los ritos y sacrificios. *Estudios de Cultura Náhuatl* 13: 97-111.
1979 Aspectos socio-económicos e ideológicos de la expansión del Estado Mexicana. In José Alcina Franch (ed.), *Economía y sociedad en los Andes y Mesoamérica*, Universidad Complutense de Madrid, pp. 73-94.
1982 Metodología en el estudio de culto y sociedad mexicana. *Anales de Antropología* 19(2): 123-137.
- CALNEK, Edward E.
1974 Conjunto urbano y modelo residencial en Tenochtitlan. In Borah et al. (eds.), *Ensayos sobre desarrollo urbano de México*, SEP-SETENTAS, pp. 11-65.

- 1978 El sistema de mercado de Tenochtitlan. In P. Carrasco and J. Broda (eds.), *Economía política e ideología en el México prehispánico*, Nueva Imagen, pp. 97-114.
- CARRASCO, Pedro
- 1961 The Civil-Religious Hierarchy of Ancient Mesoamerican Communities: Pre-Spanish Background and Colonial Development. *American Anthropologist* 63: 483-497.
- 1971 Social Organization of Ancient Mexico. *Handbook of Middle American Indians* 10: 349-375.
- 1978 La economía del México prehispánico. In P. Carrasco and J. Broda (eds.), *Economía política e ideología en el México prehispánico*, Nueva Imagen, pp. 13-76.
- 1979a Las fiestas de los meses mexicanos. In Barbro Dalhgren (ed.), *Mesoamérica: Homenaje al Doctor Paul Kirchhoff*, INAH, pp. 152-160.
- 1979b La aplicabilidad a Mesoamérica del modelo andino de verticalidad. In José Alcina Franch (ed.), *Economía y sociedad de los Andes y Mesoamérica*, Universidad Complutense de Madrid, pp. 237-243.
- CARRASCO, Pedro and J. BRODA (eds.)
- 1976 *Estratificación social en la Mesoamérica prehispánica*. SEP-INAH.
- 1978 *Economía política e ideología en el México prehispánico*. Nueva Imagen.
- CASO, Alfonso
- 1963 Land Tenure among the Ancient Mexicans. *American Anthropologist* 65: 863-878.
- CASTILLO, F. Victor M.
- 1972a Unidades nahuas de medio. *Estudios de Cultura Náhuatl* 10: 195-223.
- 1972b *Estructura económica de la sociedad mexicana*. UNAM.
- CHAPMAN, Anne C.
- 1975 Port of Trade Enclave in Aztec and Maya Civilizations. In Karl Polanyi et al. (eds.), *Trade and Market in the Early Empire*, The Free Press, pp. 114-153.
- CHIMALPAHIN, Domingo
- 1965 *Relaciones originales de Chalco Amaquecan*. Silva Rendón (trad.), Fondo de Cultura Económica.
- Codex Maghabechino*
- 1970 Ferdinand Anders (ed.). Akademische Druck-u. Verlagsanstalt.
- Códice Chimalpopoca*
- 1975 Primo Feliciano Velázquez (trad.), UNAM.
- Códice Florentino* (CF)
- 1950-1969 Arthur J. O. Anderson and Charles E. Dibble (trad.), 12 vols, University of Utha and the School of American Research.
- 1979 Facsimil edición, 3 tomos, Archivo General de la Nación (México).
- Códice Mendocino* (CM)
- 1964 José Corona Núñez (ed.), *Antigüedad de México* tomo 1: 5-149.
- Códice Tudela*
- 1980 José Tudela de la Orden (ed.), Ediciones de Cultura Hispánica del Centro Iberoamericana de Cooperación.
- コルテス
- 1980 「報告書簡」伊藤昌輝訳 サアグン, コルテス, ヘレス, カルバハル著『征服者と新世界』岩波書店, pp. 113-434.
- DALHGREN DE JORDAN, Barbro
- 1963 *La grana cochinilla*. José Porrúa e Hijos.
- DAVIES, Nigel
- 1968 *Los señorios independientes del imperio azteca*. INAH.
- DYCKERHOFF, Úrsula and Hanns S. PREM
- 1976 La estratificación social en Huexotzinco. In P. Carrasco and J. Broda (eds.), *Estratificación social en la Mesoamérica prehispánica*, SEP-INAH, pp. 157-180.

- DURÁN, Fray Diego de
1967 *Historia de las Indias de Nueva España e Islas de la Tierra Firme*, 2 toms. Porrúa.
- DURAND-FOREST, Jacqueline de
1967 El cacao entre los aztecas. *Estudios de Cultura Náhuatl* 7: 155-181.
1971 Cambios económicos y moneda entre los aztecas. *Estudios de Cultura Náhuatl* 9: 105-124.
- GARCÍA QUINTANA, Josefina
1980 Salutación y suplica que hacía un principal al tlatoani recién electo. *Estudios de Cultura Náhuatl* 14: 65-94.
- GARIBAY, K. Angel M.
1943 *Huehuellatolli, Documento A*. *Tlalocan* 1(1): 31-53, 1(2): 81-107.
- GARIBAY, K. Angel M. (ed.)
1973 *Teogonía e historia de los mexicanos*. Porrúa.
- GARZA, Mercedes de la
1980 El ullamalitzli en el siglo xvi. *Estudios de Cultura Náhuatl* 14: 315-333.
- GÓMEZ DE OROZCO, Federico
1945 Costumbres, fiestas, enterramiento y diversas formas de proceder de los indios de Nueva España. *Tlalocan* 2(1): 37-67.
- HAMMOND, Norman et al.
1977 *Maya Jade: Source Location and Analysis*. In D. J. Browman (ed.), *Cultural Continuity in Mesoamerica*, Mouton, pp. 55-65.
- HARNER, Michael
1977 The Ecological Basis for Aztec Sacrifice. *American Ethnologist* 4: 117-135.
- HARRIS, Marvin
1977 *Cannibals and Kings: The Origins of Culture*. Random House.
- HARVEY, Herbert R. and Hanns J. PREM (eds.)
1984 *Explorations in Ethnohistory: Indians of Central Mexico in the Sixteenth Century*. University of New Mexico Press.
- HICKS, Frederic
1974 Dependent Labour in Prehispanic Mexico. *Estudios de Cultura Náhuatl* 11: 243-266.
1979 "Flowery War" in Aztec History. *American Ethnologist* 6: 87-92.
- 小林致広
1975 『アステカ帝国』の成立過程——土着史料による試み——『史林』58(2): 137-176。
1979 『帝都』メヒコにおける食料調達の問題——貢納表の分析——『史林』62(4): 93-130。
- LEÓN-PORTILLA, Miguel
1978 Minería y metalurgia en el México antiguo. In León-Portilla et al. *La Minería en México*, UNAM, pp. 5-36.
1980 *Toltecatoytl: aspectos de la cultura náhuatl*. Fondo de Cultura Económica.
- LITVAK KING, JAIME
1971 *Cihuatlán y Tepeacoacuilco, provincias tributarias de México en el siglo xvi*. UNAM.
- LÓPEZ-AUSTIN, Alfred
1980 *Cuerpo humano e ideología: las concepciones de las antiguas nahuas*. 2 tomos. UNAM.
- MATOS MOCTEZUMA, Eduardo
1979 Una máscara olmeca en el Templo Mayor de Tenochtitlan. *Anales de Antropología* 16: 11-20.
- MOLINA, Fray Alonso de
1970 *Vocabulario en lengua castellana y mexicana y mexicana y castellana*. Porrúa.
- MOLINS FÁBREGA, N.
1954/1955 El Códice Mendocino y la economía de Tenochtitlan. *Revista Mexicana de Estudios Antropológicos* 14(1): 333-335.

- MONJARÁS-RUIZ, Jesús
 1976 Panorama general de la guerra entre los aztecas. *Estudios de Cultura Náhuatl* 12: 241-264.
- MORENO, Manuel
 1931 *La organización política y social de los aztecas*. UNAM.
- モルガン
 1958 『古代社会』 青山道夫訳 岩波書店。
- MOTOLÍNIA, Fray Toribio de Benavente
 1971 *Memoriales o libro de las cosas de Nueva España y de los naturales de ella*. UNAM.
- MURRA, John V.
 1962 Cloth and its Functions in the Inca State. *American Anthropologist* 64: 710-728.
- OFFNER, Jerome A.
 1981 On the Inapplicability of "Oriental Despotism" and the "Asiatic Mode of Production" to the Aztecs of Texcoco. *American Antiquity* 46(1): 43-74.
 1983 *Law and Politics in Aztec Texcoco*. Cambridge University Press.
- OLIVERA, Mercedes
 1978 *Pillis y macehuals: las formaciones sociales y los modos de producción de Teccali del siglo xiii al xvi*. Ediciones de la Casa Chata.
- PALERM, Angel and Eric WOLF
 1972 *Agricultura y civilización en Mesoamérica*. SEP-SETENTAS.
- PINO, Vivre
 1972 Tlacatecutli, tlacochtecutli, tlacatécatl y tlacochcácatl. *Estudios de Cultura Náhuatl* 10: 315-326.
 1976 Esquema provisional de la organización militar mexicana. *Actas de XII Congreso Internacional de Americanistas (México, 1974)* 2: 169-178.
- PIRES-FERREIRA, Jane W.
 1978a Obsidian Exchange Networks: Inference and Speculations on the Development of Social Organization in Formative Mesoamerica. In D.J. Browman (ed.), *Cultural Continuity in Mesoamerica*, Mouton, pp. 49-78.
 1978b Shell Exchange Networks in Formative Mesoamerica. In D.J. Browman (ed.), *Cultural Continuity in Mesoamerica*, Mouton, pp. 79-100.
- REYES GARCÍA, Luis
 1977 *Cuahtinchan del siglo xiii al xvi. Formación social y desarrollo histórico de un señorío prehispánico*. Franz Steiner.
 1979 La visión cosmológica y la organización del imperio mexicano. In Barbro Dalhgren (ed.), *Mesoamérica: Homenaje al Doctor Paul Kirchhoff*, SEP-INAH, pp. 34-40.
- ROJAS RABIELA, Terresa
 1979 La organización del trabajo para las obras públicas: coatequitl y las cuadrillas de trabajadores. In Elsa Cecilia Frost, Michael C. Meyer and Josefina Zoraida Vázquez (comp.), *El trabajo y los trabajadores en la historia de México*, El Colegio de México, University of Arizona Press, pp. 44-66.
- ROUNDS, J.
 1977 The Role of the Tecutli in Ancient Aztec Society. *Ethnohistory* 24: 343-361.
- SAHAGÚN, Fray Bernardino (HG)
 1975 *Historia general de las cosas de Nueva España*. Porrúa.
- SAHLINS, Marshall D.
 1976 *Culture and Practical Reason*. Chicago University Press.
- SCHOLES F. V. and E.B. ADAMS
 1957 *Información sobre los tributos que los indios pagaban a Moctezuma, año de 1554*. José Porrúa e Hijos.
- SELER, Eduard
 1960 Altmexikanischen Schmuck und soziale und militärische Rangabzeichen. *Gesammelte Abhandlungen zur Amerikanischen Sprach und Altertumskunde* 2: 509-619.

SIMÉON, Remi

1977 *Diccionario de la lengua nahuatl o mexicana*. Siglo XXI.

SPENCE, Michael W. and Jeffrey R. PARSONS

1972 Prehistoric Obsidian Exploitation in Central Mexico: A Preliminary Synthesis. *Miscellaneous Studies in Mexican Prehistory and Anthropological Paper* 45: 1-45.

SULLIVAN, Thelma D.

1972 The Arms and Insigna of the Mexica. *Estudios de Cultura Náhuatl* 10: 155-193.

1974 The Rhetorical Orations, or Huehuetlatolli, Collected by Sahagún. In Murno S. Edmonson (ed.), *Sixteenth Century Mexico: The Work of Sahagún*, University of New Mexico Press, pp. 79-109.

1980 Tlatoani and Tlatocayotl in the Sahagún Manuscripts. *Estudios de Cultura Náhuatl* 14: 225-238.

TEZOZÓMOC, Hernando Alvarado

1975 *Crónica mexicana*. Porrúa.

THOUVENOT, Marc

1982 *Chalchihuitl, Le Jade chez les Azteques*. Institute d'ethnologie.

TOVAR, Juan de

1972 *Manuscrit Tovar: Origines et croyances des indiens du Mexique*. Jacques Lafaye (ed.), Akademische Druck und Verlagsanstalt.

TOWNSEND, Richard F.

1979 *State and Cosmos in the Art of Tenochtitlan*. Dumbarton Oaks.

VALLEJO, José Rodríguez

1976 *Ixcatl. El algodón mexicano*. Fondo de Cultura Económica.

VÁZQUEZ CHAMORRO, Germán

1981 Las reformas socio-económicas de Motecuhzoma II. *Revista Española de Antropología Americana* 11: 207-217.

VINCOURT, Jorge Canseco

1966 *La guerra sagrada*. INAH.

WEIGAND, Phil C., G. HARBOTTLE and Edward V. SAYRE

1977 Turquoise Sources and Source Analysis: Mesoamerica and the Southwestern U.S.A. In Timothy K. Earle and Jonathon E. Ericson (eds.), *Exchange Systems in Prehistory*, Academic Press, pp. 15-35.

ZANTWIJK, Rudolf A. van

1967 La organización de once guarniciones aztecas: una nueva interpretación de los folios 17^v-18^r del Códice Mendocino. *Journal de la Société des Americanistes* 56: 149-169.

1970 Las organizaciones social-económicas y religiosas de los mercaderes gremiales aztecas. *Boletín de Estudios Latino-Americanos (Amsterdam)* 10: 1-26.

ソリタ

1982 「ヌエバ・エスパニヤ報告書」小池佑二訳『大航海時代叢書 第Ⅱ期 13』岩波書店, pp. 3-231。